

名古屋蓬左文庫蔵『天文図象玩占』について 附・全文翻刻

Supplementary Note and Reproduction of *Tennon Zusho Gansen* in the Collection of the Hosa Bunko Library in Nagoya
MIZUGUCHI Motoki

水口幹記

はじめに

本稿で対象とするのは、名古屋市蓬左文庫が所蔵する『天文図象玩占』という名の漢籍である。蓬左文庫は、尾張徳川家の旧蔵書を中心に日本・中国・朝鮮の古典籍を所蔵する公開文庫であり、現在の蔵書数は約十二万点に上っている。さらに、書籍だけではなく、尾張徳川家に伝えられた二千枚をこえる絵図も所蔵しており、名古屋の城下図から世界図におよぶ古地図や屋敷図・庭園図など、多彩な内容の絵図が含まれており、尾張徳川家の歴史のみならず、当時の書籍流通の様相をうかがうこともできる優れた文庫となっている⁽¹⁾。

本稿で対象とする『天文図象玩占』（請求番号一〇一―二）は、全四冊（不分巻）で構成されている天文関係の占書であり、文庫では「子部・術数類」に分類されている。各巻の法量は、縦二八・五センチ、横一六・七センチであり、丁数はそれぞれ第一冊は五十五丁、第二冊は六十三丁、第三冊は三十六丁、第四冊は五十六丁となっている。外題は

「天文圖象玩占（共四）」であり、見返には第一冊の左隅に「此巻前後共五十五葉」、第三冊の左隅に「三十五頁」、第四冊の左隅に「六十一頁」とそれぞれ記されていて、表紙は朱色（丹表紙）で、綴じ目は五つ目綴じとなっている。成立年代・編者ともに不明であるが、成立年代については蓬左文庫のデータでは「明」としている。

本文の記載形態であるが、全体では、朱で記された四周単辺で界線はなく、文字は墨書（黒）である。序・目録・後序は一百九〇十行で記され、本文は上下二段組みで、上図下文（占文が記される）形式を採用している。図は彩色であり、文は墨書（黒）で記され、基本的に一頁に一項目が記載されているが、時折、例外もある（図1〜4参照）。

本書の基礎情報は以上の通りであるが、本書の最大の特徴は、蓬左文庫本と同名の書名を持つ本が管見の所未発見であるという点にある。各種データベースなどを検索してもヒットすることが無く、天下の孤本と言えるかもしれないのである。この点を視野に入れ、以下、内容の検討に移ろう。

①『天文図象玩占』の構成と引用書目

(一) 構成

本節では各巻毎の構成と引用書目について紹介していく。

(1) 第一冊

本冊は、冒頭部に全体に関わる「御製序」(二オ)が載せられている。続いて、「天文図象玩占」(一ウ〜二オ)と題される序文(以下、序文というときこれを指す)が記されており、本冊には二種類の序が付せられていることになる。その後、「天文図象玩占目録」(二ウ〜四ウ)と続き、本文(五オ〜五十五ウ)が記載されている。御製序以下の各項目の詳細などについては、全文翻刻を参照してもらいたいが、ここでは全体像の把握のために、本文に記載された各項目名を掲げておく。

日之應氣・瑞異・祥光・燭耀・熒煌・二彗・重光・黄氣・青雲・龍鳳抱日・黄人守日・黒氣蔽塞・過中光暗・日未入無光・日已出光暗・色赤如赭・色赤如血・無雲光暗・雲尽赤無光・中分再出再没・日消小日中鳥燕見・日隕至地・日闕・日月晝見・飛流犯日・妖星宵出・衆日並出・當晝明晦・日中黒氣・齒足俱見・日月並出・赤色占・青色占・黄色占・黒色占・青龍守日・黒氣如人・赤雲如輪・雲如虎踞・氣如冬株・如人持牽・青氣如馬・氣如青鷄・氣如斧鉞・赤氣如杵・赤氣如血・氣如布席・赤氣如牛・青氣如人・雲氣如車・青氣占・黒雲貫日・直氣・交氣・氣如人頭・氣如死蛇・氣如二鳥・雲氣如龍・氣如旗・雲氣如箒・白氣扶日・赤氣如三鳥・赤雲如鷄・雲氣如箭・氣如虎・曲雲向日・氣青黄赤白・雲似虹・赤雲在上・雲氣交貫・雲氣如蛇・左右抱氣・左右背氣・一珥・兩珥・直氣・三珥・四珥・交氣・玦氣・直格氣・紐氣・纓氣・戴氣・承氣・冠氣・負氣・履氣・戟氣・提氣・半暈兩珥・半暈向上兩珥・上重半暈及兩珥・下重半暈珥・上下連環四珥・日暈東西連環四珥・上重半暈珥・下重半暈珥・暈不

合珥・重半暈珥・左上角珥・右上角珥・下珥・左下角珥・右下角珥・上珥・四珥

(二) 第二冊

本冊は、「箱三百二番 写本/天文図象玩占四冊」(一オ・遊紙)・「六十一頁」(一ウ・遊紙)という記載があり、本文(二オ〜六十三ウ)が続く。

雲氣入紫薇垣占・雲氣入北極占・雲氣入鈎陳占・雲氣入天皇大帝占・雲氣入四輔占・雲氣入五帝內座星占・雲氣入天柱星占・雲氣入六甲星占・雲氣入御女星占・雲氣入女史星占・雲氣入柱史星占・雲氣入大理星占・雲氣入陰德星占・雲氣入天牀星占・雲氣入華蓋星占・雲氣入傳舍星占・雲氣入華蓋占・雲氣入八穀星占・雲氣入文昌星占・雲氣入天牢星占・雲氣入勢星占・雲氣入北斗星占・雲氣入天理星占・雲氣入相星占・雲氣入太陽守星占・雲氣入天乙星占・雲氣入太乙星占・雲氣入天棊星占・雲氣入玄戈星占・雲氣入太微垣占・雲氣入東西掖門星占・雲氣入五帝座占・雲氣入幸臣星占・雲氣入太子星占・雲氣入後官星占・雲氣入郎位星占・雲氣入三台星占・雲氣入五諸侯星占・雲氣入天市垣占・雲氣入貫索星占・雲氣入女牀星占・雲氣入角宿星占・雲氣入庫樓星占・雲氣入亢星占・雲氣入折威星占・雲氣入攝提星占・雲氣入大角星占・雲氣入氐宿星占・雲氣入招搖星占・雲氣入梗河星占・雲氣入騎官星占・雲氣入房宿星占・雲氣入心宿星占・雲氣入積卒星占・雲氣入尾宿星占・雲氣入龜星占・雲氣入天江星占・雲氣入傳說星占・雲氣入魚星占・雲氣入箕宿星占・雲氣入斗宿一名南斗星占・雲氣入牛宿星占・雲氣入九坎星占・雲氣入河鼓星占・雲氣入織女星占・雲氣入女宿女占・雲氣入瓠瓜星占・雲氣入天津星占・雲氣入虚宿星占・雲氣入天壘城星占・雲氣入敗臼星占・雲氣入危宿星占・雲氣入室宿一名宮室星占・雲氣入羽林星占・雲氣入北落師門星占・雲氣入壁宿星占・雲氣入奎宿星占・雲氣入

土司空星占・雲氣入閣道星占・雲氣入附露星占・雲氣入王良星占・雲氣入婁宿星占・雲氣入天倉星占・雲氣入天大將軍星占・雲氣入胃宿星占・雲氣入天廩星占・雲氣入天困星占・雲氣入大陵星占・雲氣入天缸星占・雲氣入積尸星占・雲氣入積水星占・雲氣入昂宿星占・雲氣入蕪藁星占・雲氣入天苑星占・雲氣入畢宿星占・雲氣入五車星占・雲氣入天潢星占・雲氣入天高星占・雲氣入咸池星占・雲氣入天關星占・雲氣入參旗星占・雲氣入天園星占・雲氣入積薪星占⁽²⁾・雲氣入北河星占・(雲氣入南河星占?)・雲氣入水位星占・雲氣入狼星占・雲氣入弧矢星占・雲氣入老人星占・雲氣入鬼宿占・雲氣入燿星占・雲氣入柳宿占・雲氣入酒旗星占・雲氣入星宿占・雲氣入天相星占・雲氣入張星占・雲氣入翼宿占・雲氣入軫宿占・雲氣入器府星占・雲氣入參宿占・雲氣入玉井星占

(3) 第三冊

本冊は、本文(一オ〜三十六ウ)以外の記載はない。

木星在春季占・木星在春變色白無光占・木星在春變色赤占・木星在春變色黑占・木星在春青色占・木星在春初出小而後大占・木星初出大而後小占・木星去其舍而所去占・木星未當居而居占・木星未當去而去占・木星所衝之方占・木星有暈占・木星晝見與日爭光占・火星在夏季占・火星在夏變色青占・火星在夏變色白占・火星在夏變色黑占・火星在夏旺色赤占・火星在夏赤如炬火占・火星在夏失度吐舌占・火星在夏季逆行二舍餘占・火星留以庚辛之日占・火星在夏季若反明占・火星光芒如正旗占・火星晝見自暈占・火星勾已繞還逆行占・火星當入不入占・火星當出不出占・土星在夏季占・土星在夏季變色白占・土星在夏季行春令占・土星在夏季行冬令占・土星在夏季色旺占・土星四季失色占・土星四季旺占・土星白而潤芒占・土星在夏季色黃大無光占・土星自生暈占・土星生芒角占・

土星色白素占・土星色黃餌魚占・金星在秋季占・金星在秋季行春令占・金星在秋季行冬令占・金星在秋季行夏令占・金星在秋季旺色占・金星初出大而後小占・金星失行占・金星當入不入當出不出占・金星經巳午未位占・金星行盈縮曆占・金星出高深占・金星行疾行遲占・金星出西方占・金星出東方占・金星自主暈占・金星晝見與日爭光占・金星色赤焱然占・金星光明見影占・水星在冬季旺占・水星在冬季行冬令占・水星在冬季行夏令占・水星在冬季行秋令占・水星在冬季旺占・水星不以時而出占・水星當入不入占・水星當出不出占・水星與金星各在一方占・水星來抵金星占・金星環遶水星占・水星出東方色赤占・水星經天晝見占

(4) 第四冊

本冊は、第一冊同様に「目錄」(一オ〜三オ)が収載され、その後、本文(四オ〜五十五ウ)となっている。そして、最後に「天文圖象玩占後序」(五十六オ〜五十六ウ)が付せられ本書が閉じられている。

重抱氣・四珥兩抱氣・三抱兩珥・一抱一背・背珥二氣・冠珥一氣・戴珥二氣・冠纓二氣・冠紐兩珥・抱珥重光・二背一直・一抱兩珥・戴冠二氣・珥戴二氣・冠紐二氣・珥纓二氣・冠珥背珥・背珥直交・直背二氣・抱直二氣・虹抱兩氣・日暈・半暈・日上半暈・半暈相同・半暈・兩半暈相合・暈井垣如車輪・方暈上下二輩背・方暈・交暈・連環暈・重暈・暈內抱珥・暈外抱珥・暈珥直虹・暈抱背・暈珥二氣・暈負二氣・暈珥虹・暈珥虹・暈背二氣・暈抱珥虹珥・暈背虹直珥・暈四抱・暈抱二氣・重暈背珥・半暈背珥・半暈背珥・暈冠珥紐・暈四珥四珥四背・暈負二氣・暈珥・暈白虹・暈四背・暈抱二氣・暈背二氣・白虹貫暈・暈虹・雲氣如眼・彗星見日下・日食妖氣・日食黑氣・日食氣如鳥夾日・日食暈珥・日食有白兔・日食有四珥・日食暈兩珥・氣如人隨・雲如禽獸・雲氣如杵・月生齒・月垂芒・月自天垂墜・月暈生珥・月暈生虹・月暈四珥・月暈三珥・重暈背珥・月暈三重・

暈虹霓・暈白氣・交暈・月暈兩珥・白暈貫月・重暈珥・十字度暈・
月暈背珥・重半暈珥・月暈玦珥・月暈珥抱・暈抱二氣・月暈戴珥・
白虹貫暈月・月生背暈・連環及斗・重暈于魁・雜氣全見・暈日月・
抱背二氣・戴珥・月生背玦・四玦・月生背玦・四提・重半暈珥

② 引用書目・諸氏説

本書は、上図下文形式であり、下文の部分は本書独自の論点を提示しているのではなく、様々な書物や諸氏説からの引用で成り立っている。以下各冊ごとに引用書目を全て掲げよう。なお、書名・諸氏説は本文の表記に従っている。

まず第一冊では、洪範傳・乾坤寶典・宋志・京房・武密占・開元占・古今占・乙巳占・尚書金櫃・淮南子・太公・春秋感精符・甘德(甘氏)・乾象新書・晋志・天文録・王朔が引用され、回数では宋志が多い。

第二冊は、荊州占・天文録・樂緯執圓微・晋書の四書に限られており、特に天文録・晋書が多い。

第三冊は、朱文公・宋志・石申・左傳・梓慎・甘德・開元占・天官書・天文廣要・荊州占・天文志・晋書・晋灼・元命包・司馬彪の各書が引用され、中でも朱文公・宋志・開元占が多い。

第四冊は、開元占・宋志・乾坤寶典・古今占・京房と、第二冊に続き引用書目は少なく、その中でも開元占・宋志が多い。

全冊を通じて利用されている書物や諸氏説はないが、宋志・開元占(開元占経)が比較的多く利用されているように感じる。また、後述するが、第三冊に「朱文公」が数多く参照されていることには注意を払っておきたい。

③ 三種の序文

前節で触れたように、本書には「御製序」・「天文圖象玩占」(序文)・「天文

圖象玩占後序」の三種の序が付されている。これらは、全文翻刻でも本文を示しているが、本節で改めて紹介し、出典なども提示しておきたい。

(一) 御製序

本書冒頭部に示される「御製序」は、本書独自の文章ではなく、後にも触れる『天元玉曆祥異賦』に付される「御製天元玉曆祥異賦序」とほぼ同文である。ここでは、国立公文書館所蔵の十冊本(昌平坂学問所旧蔵請求番号三〇五二二五七)による校勘を付し、その後、読み下し・出典の提示をしておく。御製序の出典に関しては、『天元玉曆祥異賦』の検討を行った馮錦榮氏にあるが、⁽³⁾煩を厭わず以下に挙げておく。傍線部が御製序と重なる部分である。

【本文・校勘】

御製序(一)

在天之五行、在人為五事。五事脩則休徵應、失則咎徵應。天人感應之機神矣。惟天心仁愛人君、常示變以警之。惟君明(二)必敬天、子(三)所示警、皆有惕厲修省之誠、未嘗忽也。此編明于(四)天人之際審矣。朕嗣承天序、祇若天道。動靜云為、恒慎諸此。股肱大臣與國同休(五)戚相均。今各以戒(六)、非惟使達夫吉凶之機、亦庶幾(七)理之助云。(八) 序終

(一) 御製序：御製天元玉曆祥異賦序、(二) 君明：明君、(三) 子：於、(四) 于：於、(五) 休：體欣、(六) 各以戒：各以賜之、(七) 變：其變、(八) 序文の後に、「洪熙元年五月十五日」の日付有り

【読み下し】

御製序

天に在りて五行と為(之)り、人に在りて五事と為す。五事脩まれば則ち休徵應じ、失すれば則ち咎徵應す。天人感應の機は神た

り。惟れ天心は人君を仁愛し、常に變を示して以て之を警む。惟れ明君（君明）は必ず天を敬い、示警する所に於（子）いて、皆な惕厲修省の誠有り、未だ嘗て忽せにせざるなり。此の編は天人の際を明らかにすること、審らかなり。朕天序を嗣承し、祇んで天道に若う。動靜云為、恒に諸を此に慎む。股肱の大臣は國と體（休）を同じくし欣戚（戚）相い均し。今各おの以て戒め、惟だに夫の吉凶の機に達せしむるのみに非ず、亦た燮理の助けを庶幾うと云う。

【出典】

『書集伝』（南宋の蔡沈撰。蔡沈は朱熹の弟子）卷四・洪範の注

在天為五行、在人為五事。五事修則休徵各以類應之。五事失則咎徵各以類應之。自然之理也。然必曰某事得、則某休徵心、某事失、則某咎徵心、則亦膠固不通、而不足與語造化之妙矣。天人之際未易言也。失得之幾、応感之微、非知道者、孰能識之哉。

『周易』乾卦

乾。元。亨。利。貞。：九三。君子終日乾乾。夕惕若。厲无咎。

『周易』震卦

震。亨。：象曰。洊雷震。君子以恐懼脩省。

『周易』繫辭下伝

夫坤、天下之至順也。德行恆簡以知阻。能説諸心、能研諸侯之慮。定天下之吉凶、成天下之亹亹者。是故、變化云為。

『尚書』周官

惟周王撫萬邦。：立太師・太傅・太保。茲惟三公。論道經邦、燮理陰陽。官不必備、惟其人。

(二) 天文圖象玩占（序文）

御製序は、すでに述べたように元來は『天元玉曆祥異賦』の序文であり、本序こそが本書の序文に当たると思われる。本序では「日為太陽之精」「日

者天之象」と、日が太陽の精・天の象であり、日を見ることによりその吉凶を知ることが出来ることを述べ、日に関わる十の用語「侵・象・觜・監・闇・瞢・弥・序・躋・想」について解説をしている。すなわち、本書がまず「日」に関わる内容を扱っていることを表明しているのである。このことは、本書の構成を考える上で重要な点であるが、その点は後述する。また、序文中に『周礼』の名が出ているが、實際は『晋書』（もしくは『隋書』）を参照した可能性が高い。例えば、『周礼』卷二十五・春官の経文は「眡稷掌十輝之灋、以觀妖祥、辨吉凶。一曰稷、二曰象、三曰鑑、四曰監、五曰闇、六曰瞢、七曰彌、八曰敘、九曰躋、十曰想」であり、確かに序文の文章と近いが、序文「想」の「青飢、赤兵、白喪、黑憂、黃熟」という記述は、『晋書』（『隋書』）には存在しているものの、『周礼』経文や鄭司農注には「想、雜氣有似可形想」とだけしかなく、ここからは作成することは不可能である。やはり、『晋書』（『隋書』）を直接参照していたとするのが妥当であろう。

【本文】

天文圖象玩占

日為太陽之精、光明盛實而當盈、布照四方君之象也。洪範傳曰、日者天之象也。君父夫兄之類、中國之應。有周礼十輝之象。皆見太陽之旁。侵・象・觜・監・闇・瞢・弥・序・躋・想。

稷氣、侵淫相侵。稷者陰陽五色之氣。浸淫相侵、抱珥皆玦之、属虹西短、皆為侵。

象氣、成其形象。象者雲成形象、如赤鳥夾日以飛之類。

觜、如童子所佩之觜。觜者日旁氣刺日、形如童子所佩之觜。

監、乃雲氣臨日上。監者雲氣在于日上。

闇者、日月食之而日或脱光。闇者日月食之、或脱光。

瞢、則日無光而瞢。瞢昏暗、瞢者瞢瞢不光明也。

弥、謂白虹貫日而弥天。弥者白虹弥天而貫日。

序、謂冠珥重疊而相向。序者氣如山而在日上。又云、冠珥皆瑤重疊次序于日旁。

隋、暈虹而朝隋于西。隋者雲氣也。或曰、虹詩所謂朝隋于西是也。想、思想而似如何狀。想謂氣五色有形象。青飢、赤兵、白喪、黑憂、黃熟。或曰、想者思也。赤氣為人狩之形、可想而知其吉凶。

【出典】

『晋書』卷十二・志第二・天文志中（『隋書』卷二十一・天文志下にもほぼ同文）

日為太陽之精、主生養恩德、人君之象也。人君有瑕、必露其慝以告示焉。故日月行有道之國則光明、人君吉昌、百姓安寧。（七曜条）

『周礼』眡昆氏掌十輝之法、以觀妖祥、弁吉凶。「曰禘、謂陰陽五色之氣、浸淫相侵。或曰、抱珥背瑤之属、如虹而短是也。二曰象、謂雲氣成形、象如赤鳥、夾日以飛之類是也。三曰觶、日傍氣、刺日、形如童子所佩之觶。四曰監、謂雲氣臨在日上也。五曰闇、謂日月蝕、或曰脫光也。六曰瞢、謂瞢瞢不光明也。七曰彌、謂白虹彌天而貫日也。八曰序、謂氣若山而在日上。或曰、冠珥背瑤、重疊次序、在于日旁也。九曰躋、謂暈氣也。或曰、虹也、『詩』所謂「朝躋于西」者也。十曰想、謂氣五色有形象也、青飢、赤兵、白喪、黑憂、黃熟。或曰、想、思也、赤氣為人狩之形、可思而知其吉凶也。（十輝条）

『周礼』眡禘氏掌十輝之法、以觀妖祥、弁吉凶、有禘・象・鑄・監・闇・瞢・彌・序・躋・想凡十。後代名変、說者莫同。今録其著意以次之云。（日蝕条）

『太白陰経』（唐末に編纂された総合的な兵書・李筌著）卷八・雜占総序経日月者、実也。光明盛美、布照四方、神靈禦之、葵藿向之。太陽之精、積而成象、光明外発、體魄内含。故人君法之、吉凶禍変、則必照臨下土。

『太平御覽』卷三・天部三

劉向『洪範伝』曰、日者、昭明之大表、光景之大紀、群陽之精、衆貴之象也。故曰、「日出而天下光明、日入而天下冥晦、此其効也。」故曰者天之象、君父夫兄之類、中国之心也。明王之踐位、群賢履職、天下和平、黎民康寧、則日麗其精、明揚其景耀、抱珥重光、以見吉祥、君獲慶賀。

（三）後序

後序は、第四冊の最後に付された、本書の締めくくり部分に当たると、この序は大きく二つの段落に分けることが出来る。前半部は、本書編纂の理由や本書が典拠とした書物（『觀象玩占』『詳異賦』など十余家の書）、書名の由来などが記されている。そのため、以下では本文の他に、前半部の読み下しと訳を付した。出典は、後半部について一部だけ確認（完全一致するわけではない）できた。しかし、それでも見逃せない点がある。それは、後半部の「日陽人君之象也。月陰后妃之象也」という出典が確認できる部分である。なぜならば、この部分は、本書の内容に深く関わる点があるからである。その後も「故曰日月変異之形状」と述べ、あくまでも「日月」にのみ言及している。これはつまり、本書が「日月変異」を対象としていることを語っていることになるのである。この点は、本書の成立を考える上で見逃せない点であり、詳しくは後述する。

【本文】

天文圖象玩占後序

夫天象者氣也。乃陰陽五形之精、生於太陽之旁。祥變無窮占書雜涇。然載其名而未載其形。雖占無揆、以是為非。因此、今將觀象玩占詳異賦等十餘家書、都類集在一處、起自日瑞應之占。析成二百四占、依經考究、採為慶雲瑞氣之圖。謹按諸書、註其祥異休咎之占、名曰圖象玩占。俾觀者一覽于斯常變之道、瞭然在目、則崇天之術、

不亦神乎。謹識於後。

日陽人君之象也。月陰后妃之象也。君后動輿天合。故事機將發於下、則天象、光見於上、吉也凶也。告報無忒欲君后脩省彌之。此天心仁愛之深意也。故圖日月變異之形狀、旁考諸家經驗之占、極其精密伎。後世君得之、以為脩德之戒。臣得之、以為調變之助。夫豈小補哉吁。天人感應之際、淵乎微妙矣。

【前半部読み下し】

夫れ天象は氣なり。乃ち陰陽五形の精、太陽の傍に生ず。祥（祥）変は占書雜涇（注）を窮める無し。然るに其の名を載せて未だ其の形を載せず。占うと雖も扱るもの無ければ、是を以て非と為す。此れに因りて、今『觀象玩占』『詳異賦』等十餘家の書を持て、都な一處に類集して、「日瑞應之占」自り起して、析して二百四占と成し、經に依りて考究し、採りて慶雲瑞氣之圖を為す。謹しんで諸書を按じて、其の祥（祥）異休咎の占を註す。名づけて圖象玩占と曰う。

【前半部訳】

天象は氣である。そのため、陰陽五形の精は太陽の傍に生ずるのである。祥瑞変異については、占書雜注が数え切れないほどある。しかしながら、その名称（説明もこれに含まれる）を載せて、その形状は載せてはいない。占断を行おうとしても、根拠とするもの（つまり形状の図）が無いため、例えば是であっても非と見なしてしまう。そのため、今、『觀象玩占』『詳異賦』など十余家の書のみを一所に集成して、そこから「日瑞應之占」から始めて、二百四占（の占条）を選び、經典に依拠してよく検討し、（その中から）採録して（各条の）慶雲瑞氣の図を作った。謹んで諸書（占書雜注）を勘案して祥異休咎の占文を各占条に注記した。名付けて『圖象玩占』と言う。

【出典】

『晋書』卷十二・志第二・天文志中（七曜条）

日為太陽之精、主生養恩德、人君之象也。人君有瑕、必露其隱以告示焉。…月為太陰之精、以之配日、女主之象。以之比德、刑罰之義。…

④『天元玉曆祥異賦』について

前節において「御製序」が『天元玉曆祥異賦』の序を引き写していることを指摘した。このことから、本書が『天元玉曆祥異賦』と何らかの関係があることは明白であり、本書を理解するためにも、本節で『天元玉曆祥異賦』について簡単に紹介しておきたい。なお、『天元玉曆祥異賦』について言及する論考はさほど多くはないが、先行研究としては、早くは馮錦榮氏の研究⁽⁴⁾があり、近年その不足を補った佐々木聡氏による詳細な研究⁽⁵⁾が発表された。この両氏の研究により、『天元玉曆祥異賦』を理解する手掛かりは格段に増えることとなった。本稿でも、両氏（特に数多くの原本調査を行った佐々木氏の論考）に依るところが大きいこと、あらかじめ了解して頂きたい⁽⁶⁾。

『天元玉曆祥異賦』は、明代に編纂された天文五行占を集成した術書類書である。『仁宗実録』卷六・洪熙元年正月丙戌（十五日）条には、

賜三公及六部尚書『天元玉曆（祥）異賦』。上初得此書以示侍臣曰、天道人事未嘗判為二途、有動於此、必応於彼。朕少侍太祖每微以慎修敬天。朕未嘗敢怠。此書言簡理当。左右輔臣亦宜知之。遂命印刊、上親製序曰、…

とあり、『天元玉曆祥異賦』が仁宗の施策として行われたこと、それが、秘蔵されることなく、臣下らに示され「印刊」が命じられたことがわか

る。このことから、佐々木氏は、実際には高位の臣下のみならず、比較的広く頒布したのではないかと推測している。現在、日本・中国・台湾・韓国・アメリカに四十部以上の伝本があること、また、確認されていない伝本があることも想定できることから、佐々木氏の推測は妥当であろう。

しかし、実は『天元玉曆祥異賦』は形式や内容は一様ではなく、形式から大きく分けると以下の三つに分けることが出来る。

(A) 有図有注本：(a) 彩色抄本、(b) 刊本

(B) 無図有注本

(C) 無図無注本

佐々木氏が「代表的形式」と評するように、(A)が『天元玉曆祥異賦』において最も伝本も多く、本書『天文図象玩占』を考える上で重要な役割を果たしている。特に(a)は、本書同様に上下二段に分かれ、上段に彩色で図が描かれ、下段に様々な書物から引用された占文が配されており、本書と同形式である。この形式では、基本的に正文に「朱文公曰」と記された文章が示され、その後占文が記されていく。また、(b)は(a)を簡略化したもので、彩色はない。(B)(C)はその名の通り、共に図が無く、当然上下二段形式ではなく、本書とは形式を異にする。

これらの成立の先後関係については佐々木氏が詳細に検討している。佐々木氏によると、「最も古い無図有注本から無図無注本が作られ、それを底本として明・仁宗のとき内府刊本が作られた。その後、改めて無図無注本と無図有注本及び北宋・仁宗御撰の『宝元天人祥異書』を参考に、新たに注釈を諸書から集めて、彩色抄本(有図有注本)が作られた」のであり、彩色抄本の成立時期は「仁宗崩御の前後」と想定している。つまり、上記の記号で示すと(B)↓(C)↓(A)の順で成立したことになる。

ここで、佐々木氏の文中で触れられている『宝元天人祥異書』に

ついで述べておきたい。『宝元天人祥異書』は、『統資治通鑑長編』巻一百二十五・宝元二年(一〇三九)十一月癸巳条に、

癸巳、以皇子生、燕宗室於太清樓、誦『三朝宝訓』、賜御詩。又出『宝元天人祥異書』示輔臣。其書蓋上所集天地・辰緯・雲氣・雜占、凡七百五十六、釐三十門、為十卷。

とあるように、北宋の仁宗代に作成された大部の天文五行占書であり、「輔臣に示す」という点も『天元玉曆祥異賦』と類似しており、明の仁宗は北宋の仁宗の事跡を意識していたとも考えられている。現在は、日本では宮内庁書陵部に蔵されており(函架番号四〇四函一五号)、佐々木氏の調査により台湾国家図書館に一部、上海図書館に三部存在していることが明らかとなった。これらは全て本書や『天元玉曆祥異賦』(A1a)同様に、上下二段の上下文形式であり、図も彩色が施されており、やはり本書を考える上で見逃すことの出来ない書物である。

⑤ 『天文図象玩占』の原形

さて、先程来述べてきているように、本書の「御製序」が、多少の相違点があるものの『天元玉曆祥異賦』の序とほぼ同じであることや上下二段の上下文形式であること、図には彩色が施されていることなどから、本書と『天元玉曆祥異賦』との関係は密接なものであったことがうかがえる。このことは、後序に「此れに因りて、今『観象玩占』『詳異賦』等十余家の書を將て、都な一処に類集して」とあることから、編者は『観象玩占』(『天元玉曆』祥異賦)を見ていることが明らかである。そのほか、序文の典故から『晋書』天文志(『隋書』天文志)なども参照していたであろうことが推定できる。そこで、今一度引用書目に目を向けてみると、第三冊に「朱文公」が数多く引用されていることに気が付く

あろう。前節で述べたように、「朱文公」は『天元玉曆祥異賦』の特徴であり、少なくとも第三冊が『天元玉曆祥異賦』の影響下に成立したことがうかがえるのである。

そこで、本書全体と『天元玉曆祥異賦』（内閣文庫の彩色十冊本を参照）とを詳細に比較検討してみると、本書第二冊と第三冊は、図案・内容・項目ともに『天元玉曆祥異賦』とほぼ同じであることが明らかとなった。そして、内閣本を例に取ると、本書第二冊は十冊の内の第八冊に、本書第三冊は第五冊にそれぞれ相当している。ちなみに、東洋文庫本では、本書第二冊は、一つは第九冊（明本）、一つは第七冊（朝鮮本）に相当し、本書第三冊については、共に第五冊に相当していることが判明した。すると、本書第三冊の最後に記されている「第五冊終記三十六葉」は、明本の『天元玉曆祥異賦』十冊本の第五冊のことを指すと思われる、第二冊・第三冊は『天元玉曆祥異賦』中の一冊をそれぞれ写したものだということとは明らかである。伝存する『天元玉曆祥異賦』の全てが同一構成を取るわけではないため、本書は内閣本十冊本と同系統の『天元玉曆祥異賦』を写した可能性が考えられると、ひとまずは言うことができるであろう。しかし、問題なのは本書第一冊と第四冊である。両冊には「朱文公」からの引用はなく、なによりも『天元玉曆祥異賦』とは合致しないのである。一例を挙げて説明しよう。

燭耀（図4）

宋志曰、聖人在上、群賢履職、乘土德旺、其政太平、則五色。其五行之色備具、燭耀不主于一也。
京房曰、聖人在上、寅亮天工、則日之光明五色備具。

本項目は、本書第一冊に含まれており、項目名は「燭耀」である。上段では、太陽が中心にあり、上下に雲が描かれている。背景は浅葱色で、

太陽は赤で色付けされ、太陽から赤・青・黄の線が放射線状に延びている。太陽上の雲は、左上は黄色で、右上は上部が青、下部が赤で塗られている。また、太陽下の雲は最内部が赤で、外部は青色である。その間は、背景と同色となっている。下段では、「宋志」と「京房」が引用され、その内容が示されている。共に、聖人が治世を行っていると、日の光が五色で耀くと説明されている。すなわち、図と文が対応していることがわかるであろう。

続いて、『天元玉曆祥異賦』（内閣十冊本。但し、図は岩瀬文庫本「分類番号一一四―一二二」を掲示）の相当部分を見てみよう（傍線部が異なる部分。以下、同様）。

聖人在上占（図5）

朱文公曰、聖人在上、五色燭耀。
宋志曰、聖人在上、群臣履職、乘土德王、其太平、則五色。俱燭耀至於一也。

京房曰、聖人在上、寅亮天工、則日之光明五色備矣。

図4 『天文図象玩占』第一冊・燭耀

注目すべきは、項目名が「聖人在上占」（岩瀬文庫本は「聖人在上吉占」と、本書と異なっていることであり、かつ、「朱文公」を引用していることである。さらに、上段の図案も異なっている。本書では、単に太陽と雲だけの表現であったものが、官服らしきものを纏った人物（恐らく聖人であろう）が中心に描かれ、背後に山が描かれ、太陽はその山の上であり、また太陽の回りに五色の雲が描かれている。また、本書では描かれていなかった建物や樹木も描き込まれている。内閣本以外の諸本も多少の相異があっても基本的には図案は内閣本と同じであり、本書よりも複雑な図案となっている。

続いて、『天元玉曆祥異賦』に影響を与えた『宝元天人祥異書』（宮内庁本を参照）とも比較してみよう。

聖人在上則五色燭耀占（図6）

宋志曰、聖人在上、群臣履職、来土徳王、其太平、則五色。備具、俱燭耀至于一也。

図5 西尾市岩瀬文庫蔵『御製天元玉曆祥異賦』・聖人在上吉占

京房曰、聖人在上、寅亮天工、則五色備矣。

ここでは、図案は本書に近く、人物や建物は描かれていない。また、「朱文公」が引用されておらず、本項目に関しては、『天元玉曆祥異賦』よりも『宝元天人祥異書』に近いことがわかる。但し、本書にはない山が描かれており、本書と必ずしも一致するわけではない。また、何よりも項目名が異なっており、この点は見逃すことの出来ない相異であると考ええる。

このように、第一冊と第四冊の内容は、関連する項目があったとしても『天元玉曆祥異賦』や『宝元天人祥異書』とは合致せず、また、上記のように関連する項目すらないものも見られる。また、後序で言及されている『観象玩占』とも本書は合致しない。『観象玩占』（蓬左文庫本を参照した）は、一部（巻一〜十）に天文図・星宿図が載るが、それ以外では図は記されず、また上下二段組でもないため、本書をここから作成することは不可能である。すなわち、第一冊と第四冊については出典が

図6 宮内庁書陵部蔵『宝元天人祥異書』第二冊・聖人在上五色燭耀占

不明なのであり、第二冊・第三冊のように『天元玉曆祥異賦』を直接写したとは、言うことができないのである。一体このことはどのように考えればいいのか。

そこで、今一度、第一冊と第四冊を見てみると、第二冊・第三冊には見られない共通する特徴があることがわかる。それは、目録の存在である。通常目録は、全体の冒頭部分にのみ付されるものであるが、本書では何故か第一冊と第四冊の両冊冒頭に付されている。第一冊の目録は第一冊に収録された各項目が、第四冊も同様に第四冊に収録された各項目が目録化されているのであり、対応関係は明確である（但し、多少の誤脱はある）。となると、第二冊・第三冊にも目録が付されるべきであるが、それがないのである。

そして、さらに重要なのが、第一冊と第四冊に収録された項目の特徴である。両冊に収録され、占文が付されているのは全て日・月の雲気占であるのに対し、第二冊・第三冊は五星や星宿の雲気占となっている。ここで今一度序文と後序の記載を思い出して頂きたい。序文では、本書を説明する際に日に関することだけが記されており、後序でも問題としていたのは、日と月のことのみである。本書全体に関わるはずの序文・後序が言及しているのは、実は第一冊と第四冊に関することだけであり、第二冊・第三冊の内容には全く触れられていないのである。

さらに、後序の「析して二百四占と成し」とある数も問題である。試みに、第一冊と第四冊の項目数を数えてみると、第一冊が一〇七項目、第四冊が一〇六項目の合計二一三項目となる。但し、本文の記された丁数（一丁二項目）で計算すると、第一冊が一〇四項目、第四冊が一〇二項目の合計二〇六項目となる。多少の誤差はあるものの、「析して二百四占と成し」は、第一冊と第四冊を合計した数であったのである。やはり、後序は両冊のことにしか言及していないことがわかる。

以上の点を総合して考えられることはただ一つ。それは、第一冊と第

四冊のみが元来の『天文図象玩占』であり、第二冊・第三冊はそれ以後から付されたものであるということである。序文には、「会輯書目及び各家の占は下巻之終に在り」という言葉があり、「下巻」という表記から上下二巻であった可能性が考えられることもこのことを傍証する。すなわち、本書『天文図象玩占』は本来は上下二冊（もしくは二巻）で作成された日月の雲気占が記された書物であったと考えられるのである。

そのように考えると、成立に関して三つの可能性が考えられる。一つは、編者が独自に図・文章を付したこと、二つは、藍本が存在し、編者はただそれを写しただけであること、三つは、藍本の有無であるが、編者がそれを独自に編纂し直したことである。藍本の有無であるが、本書は後序に「祥（祥）変は占書雜涇（注）を窮める無し。然るに其の名を載せて未だ其の形を載せず。占うと雖も抛るもの無ければ、是を以て非と為す」とあることから、図の存在は占う際に必須であるという考えがうかがえる。すなわち、図なしでは本書は成立しえないのであり、本書作成の目的もここにあるのであろう。このことは、「此の書は言簡にして理当なり。左右の輔臣、亦た宜しく之を知るべし」（明『仁宗実録』卷六、洪熙元年正月丙戌条）とある、『天元玉曆祥異賦』の編纂目的（学習に便がよい）ともリンクするだろう。但し、本書の図は彩色もあり、また数も多く図を独自に描くことは難しいと考えられ、何らかの手本があったとみるのが妥当だと考える⁽¹²⁾。

そして、第一冊・第四冊の配列が実は『天元玉曆祥異賦』の配列・項目に近いものがあるのも事実である。第一冊の四十九才「提氣」（『天元玉曆祥異賦』「日旁提氣占」）↓「天元玉曆祥異賦」「雜氣刺日占」↓第四冊の四才「重抱氣」（『天元玉曆祥異賦』「日旁重抱兩珥占」）と、冊を跨いで一応配列がつながる⁽¹³⁾。また、『天元玉曆祥異賦』と文章が完全に異なるわけではなく、さらには、本書には『天元玉曆祥異賦』の序とはほぼ同文の「御製序」が付せられており、『天元玉曆祥異賦』の影響を排

除することはできない。これらの点から、第一冊と第四冊は、現存する『天元玉曆祥異賦』の別系統の可能性も考えられることになる。

しかしながら、両書の決定的な相異は、本書第一冊・第四冊では『天元玉曆祥異賦』の特徴である「朱文公」を引用していないことである。また、先ほど確認したように図も『天元玉曆祥異賦』よりシンプルである。そう考えると、『天元玉曆祥異賦』より以前の成立で、「朱文公」を引用していない『宝元天人祥異書』の別系統の可能性が考えられよう。但し、これにも問題がある。一つは、「御製序」の存在であるが、この点は、第二冊・第三冊を付した際に付け加えられたと考えれば、解決できる⁽¹⁴⁾。しかし、配列・項目は『天元玉曆祥異賦』のほうがより重なるという点は注意しなくてはならない。『宝元天人祥異書』では、本書は作成できないのである。

以上の点を踏まえて考えると決定的なことは不明とするほかないが、可能性の一つとして、本書の存在によって、現存する『宝元天人祥異書』とは配列・項目が、より『天元玉曆祥異賦』に近いものが存在していたのかもしれないということは言えるであろう。もし、そうならば、本書はそれを窺い知ることのできる天下に残された大変貴重な孤本ということになるのである。

⑥『天文図象玩占』の日本への伝来と成立の問題

蓬左文庫は、「はじめに」で述べたように、尾張徳川家が収集した書籍を中心に構成されている。この文庫（書庫）は「御文庫」と総称され、多くの蔵書目録が作成された。蔵書目録は古いものは廃棄されるのが普通であったが、尾張徳川家の場合は、比較的多くの蔵書目録が幸いなことに現在に伝えられている。蔵書目録は「御書籍目録」（寛永目録）・「御文庫御書目録」（寛政目録）・「尾張御文庫御書目」（文化十三年目録）など様々な名称が付けられているが、本稿では括弧内で示した「年号＋目

録」で呼称することとする⁽¹⁵⁾。

さて、本書が蔵書目録に初めて登場するのは、「天明二年目録⁽¹⁶⁾」においてである。そこでは単に「天文図象玩占 写本 四冊」と記されているだけで、その来歴は不明であるが、「寛政目録⁽¹⁷⁾」にその詳細が記されている。

一、天文図象玩占 二百六十九 写本 四冊

此御本享保六年 御本丸ヨリ出候御本之内ニ有之。享保御目録ニハ雲氣書六冊と有之候得共、右六冊之内二冊ハ、源敬様御書物之内、史異編之内ニ而御座候付、今般相訂申候。

本書は「御時代不詳御書籍」の一つとして収載されているのであるが、ここに記された経緯によると、本書は享保六年（一七二二）に「御本丸」から出した御本の内にあった。享保の目録には「雲氣書六冊」とあるが、そのうち二冊は源敬様（初代当主徳川義直）の書物のうち、「史異編」の内にあたるため、今回訂正したとのことである。「御本丸」は、享保六年以前は書物奉行の管轄外であった書物を、書物奉行に引き継いだものであって、来歴不明のものもあるが、義直・光友の蔵書と判明する書籍も少なくない⁽¹⁸⁾とされているものであり、本書もまた義直・光友の蔵書であった可能性が高い⁽¹⁹⁾。この記述で注目すべきは、享保の目録では「雲氣書」の書名で記載されていたこと、それが六冊であったがそのうち二冊は「史異編」のものであり本来は四冊であったことである。後者に関して、同じく「寛政目録」には、以下のようにある（敬公（義直）書籍）として収載）。

一、史異編 百四十五 唐本 六冊

此御本寛永五年辰御買上、寛永慶安御目録ニ史異六冊と記し有之。

享保御目録ニハ史異編四冊と記し有之。寛保改之節、史異六冊之御本不相見候付、当時無御座由之御目録ニ書載申候得共、其後史異編四冊之御本見出、此御本之事相知候と相見、寛永御目録へ二冊不見之書込、寛保御目録ニ史異編四冊辰年御買上と書載申候。今般吟味仕候処、享保六年御本丸ヨリ出候御本丸之内ニ雲気書六冊有之。右之内四冊ハ赤表紙、二冊ハ玉子表紙之由、享保御目録ニ書付有之。寛保安永之御目録相准し来候。天明二年改之節如何いたし候事ニ哉。右六冊之内玉子表紙二冊ハ瑞竜院様御隠居ノ後御書目之内江祥異図説二冊と書加、雲気書六冊を四冊と張訂申候付、享保寛保之御目録吟味仕候処、瑞竜院様御隠居ノ後御書籍之内ニ祥異図説ハ無御座候、段々吟味仕候得共、此二冊ハ史異編四冊之御本と大小綴糸紙等迄全同物_ル而全部無紛相見申候。元合刻六冊ニ而寛永慶安御目録ニ六冊と記し、其後二冊被召上御本丸ニ納申候付、享保御目録以来四冊ニ相成候事と相見申候、仍而相訂申候。

これによると、『史異編』は、寛永五年（一六二八）に買い上げ、寛永・慶安の目録には「史異六冊」と記載されていた。しかしながら、享保の目録には「史異編四冊」とあり、冊数に齟齬が生じていた。寛保の点検時に「史異六冊」を見付けられなかったため、その旨を目録に書いたのだが、その後、四冊だけを見付けたので、当該書だと思ひ、寛永の目録に「二冊は見当たらない」との書き込みをして、寛保の目録に「史異編四冊辰年御買上」と書き記した。そして、寛政の調査において、享保六年に本丸から出た書物である「雲気書六冊」に対して、天明二年の調査で、これら六冊のうち二冊を光友（瑞竜院様）の目録中に「祥異図説」と書き加え、「雲気書」六冊を四冊と訂正をしたことが判明したが（このとき、書名を「天文図象玩占」としたとの記述はなく、上記の「天文図象玩占」の項目との書名の齟齬が見られる）、享保・寛保の点検で

は光友の蔵書には「祥異図説」が無かったため、両者の相異の原因を調べたところ、その二冊が実は『史異編』の一部であると判明した。つまり、元々六冊だったもののうち、二冊が本丸に召し上げられたため、享保目録以来四冊となっていたことがわかったのであり、そのため訂正したのである。そうなること、ここに記された「御本丸」に召し上げられた二冊が、上述した「天文図象玩占」の項目に記された「雲気書」に紛れ込んでいた二冊ということになる。この二冊が「雲気書」、すなわち、『天文図象玩占』に含まれて一書とみなされていた理由であるが、それは、『史異編』全六冊の内、第五冊・第六冊は『天元玉曆祥異図説』（上記したA・bに相当する）だからだと思われる⁽²⁰⁾。実際、蓬左文庫蔵の『史異編』第五冊・第六冊は、外題が「祥異圖説」と記され、細字で「史異編六冊之内」と記されている（上記から天明二年の調査で書き加えられた可能性が考えられよう）。そして、これは彩色ではなく、本書に含むには躊躇するものではあるが、上図下文形式で、かつ、雲気占などが含まれていることから同一のものと判断したのかもしれない。それを寛政の調査で改めて確認し、分類したのである⁽²¹⁾。

となると、本書や『史異編』は共に、初代藩主徳川義直、もしくは二代光友の時に入手したものであったことになる。蓬左文庫の形成母体の一つは、徳川家康が駿府において収集した書籍が家康の死後、御三家に分配されたいわゆる「駿河御讓本」である。駿河御讓本は、全体の七割が中国・朝鮮から将来した書籍であり、その中でも朝鮮本が漢籍の半数以上を占めるといふ特徴を持っている。この駿河御讓本を相続した義直と続く光友は、自らも多くの書籍を買い求めるなどして、文庫の充実に努めた。特に漢籍の割合が高いのだが、駿河御讓本とは異なり中国版本が激増しており、中国からの輸入本（唐本）を積極的に求めていたことがわかる。こうした収集過程で、本書や『史異編』が尾張藩に持ち込まれた（購入・献上・召上など）のであろう。

しかし、一つ気になることがある。『史異編』には、「唐本」「御買上」と明確に中国からの輸入本を購入したことがわかるのであるが、本書に關してはそうした類の記載が見られない。⁽²²⁾それは、本書が朝鮮本に多い「五つ目綴」という綴じ方をしていることも相まって、本書が作成された場所（これは尾張徳川家に持ち込まれた経路にも関わる）が問題となってくるのである。⁽²³⁾上記したように、本書は元来二冊本であったものを四冊に組み替えている。果たして、そうした作業がいつ・どこで行われたのが問題となるのである。

まずは、朝鮮本である可能性を考えてみたい。ここでは二つの可能性が考えられる。一つは、中国大陸（明以降）で編纂され朝鮮半島に伝来したものを装丁し直した可能性であり、二つは朝鮮半島で編纂された可能性である。この場合は、朝鮮半島で独自に編集・作図された場合と、朝鮮半島で藍本を元に編集した場合との二通りが考えられる。後者の可能性を疑わせるのは、「御製序」のあり方である。「御製序」は『天元玉曆祥異賦』（A-1a）とほぼ同文であるが、管見のものは、全て「御製天元玉曆祥異賦序」と正式名称を記しており、「御製序」と省略して記すのは本書のみである。また、「洪熙元年正月十五日」（内閣本は五月）という年代も本書のみ書かれておらず、「御製序」がやや適当に作成された感じを受ける。果たして、明代に皇帝御製の序を軽く扱うこのような行動が許されるのかと疑問になる。もし、朝鮮半島で真似て付されたのならば、合点がいく。また、『古鮮冊府』に「天元玉曆祥異賦」があり、⁽²⁴⁾こうした占書が朝鮮半島に伝来していたことが確認できる上に、ハングルで書かれた絵入り占書である『唐四柱』は、中国の書物『演禽斗数三世相』『大易断例卜筮元龟』などの共通性が確認できるといえる。⁽²⁵⁾朝鮮半島で、中国から伝来した占書を独自に編纂し直すことがあることがわかるであろう。

このように、朝鮮半島で作成、もしくは改装された書が日本に伝来し、

尾張徳川家へ入った可能性はあるのだろうか。江戸時代を通して、朝鮮半島と深い関わりがあったのは、対馬藩宗家である。宗家が幕府官学の林家へも朝鮮本を貸し出していることはすでに指摘されており、⁽²⁶⁾内閣本の『天元玉曆祥異賦』が昌平坂学問所旧蔵本（但し、明本）であることから、こういったルートも考えられる。但し、藤本幸夫氏によると宗家蔵本はほとんど全て洪引き褐色表紙に改装されているというが、⁽²⁷⁾本書は丹表紙であり、これに合致しない。果たして、本書を朝鮮本として考えても良いのだろうか。

それを考える上で重要なのが、第二冊・第三冊がいつ付け加えられたのかという問題である。この問題を解く鍵が用紙形態にある。具体的には、どこに項目名が記されているのかという点にある。各冊の項目名記載箇所を見ると、第一冊は、上段には図のみが記されており、下段右端に項目名、続いて、占文が記される構成となっている（図1・2・4参照）。第二冊は途中まで第一冊と同じ構成を取っているが、五十三オ「雲気入天厠星占」から、項目名が上段図の右端に記されるようになる（図3参照）、第三冊も全て上段図右端に項目名が記される形態となっている。しかし、第四冊になると、再び第一冊と同様に下段右端に項目名を記す形態に戻っているのである。

すなわち、第一冊と第四冊が同一書である以上、まず、第一冊・第四冊を書いた。そのため、両冊の用紙の形態は同じなのである。恐らく、ある程度余分に用紙を作成していたのであろう。その余った紙で第二冊を写していたが、途中で紙が切れ、改めて作成した際に、用紙の形態が少し変化してしまったのではないだろうか。まとめると、第一冊↓第四冊↓第二冊（途中で用紙変更）↓第三冊の順で書き継いでいったのである。

このことを傍証するのが、第二冊に発生した項目配列の錯簡である。内閣本『天元玉曆祥異賦』によると、五十三オの項目「雲気入天厠星占」

の前に、「雲気入參宿占」「雲気入玉井星占」がある。ところが、この両項目が本書第二冊では、六十三オ・ウの第二冊末尾に置かれている。もちろん、『天元玉曆祥異賦』の項目配列は、伝本によって確かに異なりこの点を根拠とするのは問題があると考えられる向きもあるが、その点に注目して管見・比較をした諸本（内閣本・東洋文庫本「二種。明抄本と朝鮮本」・ソウル大本）では、この配列―雲気入參宿占↓雲気入玉井星占↓雲気入天厠星占―は全て同じであった。そのため、『天元玉曆祥異賦』は基本的に全ての伝本でこの配列を持っていると考えられ、本書での錯簡は、用紙変更の際に発生したと考えられるべきであろう。

いずれにせよ、本書の書写順序が上記の通りだとすると、本書全四冊は全て同一箇所にて作成された可能性が高い。果たして、それが中国大陸であったのか、それとも、朝鮮半島であったのか。筆者は前者の可能性が高いと考えている。理由の一つは上述した表紙の色の相異であるが、もう一つは本書が「五つ目綴」であることあり、さらには「寛政目録」の記述である。「寛政目録」から享保の目録では本書の名称が「雲気書」とされていることがわかるのであるが、この点は極めて重要である。なぜならば、現存している『天文図象玩占』には、明確に表紙上に「天文図象玩占（共四）」と外題が墨書で記されているからである。もし、享保目録の筆録者が現存本書の外題を見ていたら、「雲気書」という名称を目録に付すことはないであろう。すなわち、享保目録作成時には、本書には外題が記されていなかったか、「雲気書」という外題の記された表紙を有していたと考えるべきであろう。そうすると、「享保目録」作成後から「天明二年目録」が作成された時期までの間に、本書に『天文図象玩占』という名称が外題に加えられて、表紙に記されていたということになる。この時に、恐らくすでに古くなっていった表紙が付け替えられ、「五つ目綴」に改装されたのではないだろうか。⁽²⁸⁾

蓬左文庫に所蔵される明本をランダムに取り上げて調査した結果、全

てが明本に最も多い形態である「四つ目綴」であった。⁽²⁹⁾ 上記で取り上げた『史異編』や『祥異図説』も同様である。これに対し、義直編纂書である『神祇宝典』（請求番号一三〇―一五）や藩の命令により編纂された尾張国の地誌である『尾張志』（請求番号一三七―一）、また蔵書目録類の中にも「五つ目綴」のものがある。⁽³⁰⁾ 尾張藩で作成された書物の中には、「五つ目綴」で作成されたものが確実に存在するのである。

以上の諸点を総合的に考えてみると、本書は中国で作成され日本に輸入された明本であり、購入・献上・召上など方法は不明であるが、初代義直、もしくは二代光友の時代に尾張徳川家に持ち込まれ、しばらくの間は藩主の元に置かれていた。この時は、多くの明本と同様に「四つ目綴」であり、外題は記されていないか、もしくは「雲気書」と記されていた。その後、享保六年に本丸から書庫に写され、この時六冊本ではなく四冊本であることの確認がなされ、⁽³¹⁾ 天明二年の目録作成の頃までには表紙が付け替えられ、外題に「天文図象玩占」との表記が付け加えられたものであったということになる。⁽³²⁾

おわりに

以上までで、本書の紹介と成立・伝来の問題を検討した。これまで本書は彩色本であり、なおかつ保存状態もよいため、⁽³³⁾ 蓬左文庫の展覧会などで展示されることはあったが、詳細に検討されることはなかった。本稿の検討で全てが明らかになったわけではないが、本書（特に第一冊と第四冊の原『天文図象玩占』が「天下の孤本」と称することもできるような内容を持つ、貴重な書物であることは指摘できたのではないかと思う。

最後に一つ付言しておきたい。本書は所蔵されるだけで、利用された形跡はない。しかし、利用されなかったからとはいえず、それが必要なかったということではない。本書の検討から、東アジア地域における本書

関連書『宝元天人祥異書』『天元玉曆祥異賦』の受容・展開の様相が見て取れ、東アジア地域における書物の流通・流布の多様性を確認することができた。このことは、日本国内における「漢籍」（唐本・朝鮮本）の位置を考えるとともに、東アジア全体における本書・本書関連本、ひいては「漢籍」全体の位置づけに注目すべきことを志向させる可能性を持っている。そしてさらに言うなれば、本書を輸入し所蔵・伝存していることは、本書を東アジア文化として受容していることを意味しているのであって、「古い」「古書」に対する東アジアの認識の問題を考えると契機ともなると思われるのである。しかし、それは今後の課題として、ここでひとまずこの拙い論を擲筆したい。

【付記】本稿執筆に際して、全文翻刻・図版掲載を許可して下さった名古屋蓬左文庫、図版掲載を許可して下さった西尾市岩瀬文庫・宮内庁書陵部の他、国立公文書館・公益財団法人東洋文庫・上海図書館・ソウル大学奎章閣など資料の閲覧を快く許可して下さった諸機関に改めて謝意を表します。また、『天元玉曆祥異賦』の情報を提供して下さった佐々木聡氏や様々な研究会・シンポジウムなどの場でご教示下さった皆様、この場を借りて感謝申し上げます。

註

- (1) 蓬左文庫については『蓬左文庫―歴史と蔵書―』（名古屋蓬左文庫、二〇一四年）による。
- (2) カッコ付きは上段に図が描かれているが、項目名・占文が載せられていないものである。項目名は、『天元玉曆祥異賦』（内閣本）から類推した。
- (3) 馮錦榮『天元玉曆祥異賦』小考―占星術の対象となった天体・気象現象を中心に―（山田慶兒・田中淡編『中國古代科学史論 續編（天文学 数学）』、京都大学人文科学研究所、一九九一年）。
- (4) 前掲3馮論文。

- (5) 佐々木聡『天元玉曆祥異賦』の成立過程とその意義について」（『東方宗教』二二、二〇一三年）。
- (6) 筆者も佐々木氏とは別に諸本調査を行った。本稿には、筆者の実見した知見も含まれている。なお、念のため、調査した諸本を挙げておくと、名古屋蓬左文庫（A1b二種）、国立公文書館（A1a、A1b、C各一種）、公益財団法人東洋文庫（A1a二種、うち一種朝鮮本、A1b一種、C一種朝鮮本）、西尾市岩瀬文庫（A1a一種、朝鮮本）、中国上海図書館（A1a二種）、韓国ソウル大学奎章閣（A1a二種、C二種、全て朝鮮本）となる。記号は本文参照のこと。
- (7) なお、現在の残る諸本には、多く「洪熙元年正月十五日」の日付が記載されている。
- (8) 時折、日本や中国で『天元玉曆祥異賦』と思われる書物がオークションに掛けられていることからそのことは裏付けられよう。
- (9) 唐の李淳風撰と言われるが、後世の仮託である。
- (10) 「十余家」が具体的に何を指すのかは、残念ながら不明とする他はない。
- (11) この「朱文公」は朱子とは直接関係がないことがすでに馮氏によって指摘されているが、佐々木氏は更に一歩進めて、金末元初の岳熙載の作であることを指摘している。
- (12) 上下二段（上図下文）構成をとる形式は、天文書・占書を例に取ると、古くは馬王堆漢墓出土帛書（馬王堆帛書）の「天文氣象雜占」や敦煌文書P2512「星占殘卷」にも図が残されており、日本に伝存している「三家簿讀」（京都府総合資料館蔵・若杉家文書）などが挙げられる。また、蓬左文庫も所蔵している『大易断例卜筮元龜』（請求番号一〇一一九）は、図には彩色が施されており、中国において伝統的な書式の一つであった。天文書・占書以外でも、敦煌文書P2010「観音経図巻」、P2683「瑞応図画巻」などは、上図（彩色）下文形式を取っており、広く行われていたことが確認できる。
- (13) 但し、第一冊では四十九ウ以降、出典が不明となるため、『天元玉曆祥異賦』を直接参照していないことは明らかでもある。
- (14) 但し、「御製序」と序文冒頭が一紙で表裏の関係であることは気になる。
- (15) 尾張徳川家の蔵書目録に関する基本的な知識は、杉浦豊治「諸『御文庫御書物目録』―自寛永至天保約二百年間の蔵書目録―」（同『蓬左文庫典籍叢録 駿河御譲本』、人文科学研究会、一九七五年）、山本祐子「尾張藩『御文庫』について（一）―義直・光友の蔵書を中心に―」（『名古屋博物館研究紀要』八、一九八五年）、同「尾張藩『御文庫』について（二）―蔵書目録からみた『御文庫』の展開―」（『名古屋博物館研究紀要』九、一九八六年）、「尾張徳川家の文庫と蔵書目録」（『名古屋蓬左文庫監修『尾張徳川家蔵書目録』第一巻、ゆまに書房、一九九九年）、桐原千文「蓬左文庫」（『稲葉伸道編『今、開かれる文庫の魅力』、名古屋大学

学院文学研究科、二〇〇五年)による。

- (16) 名古屋市蓬左文庫監修『尾張徳川家蔵書目録』第四卷、ゆまに書房、一九九九年。
- (17) 名古屋市蓬左文庫監修『尾張徳川家蔵書目録』第六卷、ゆまに書房、一九九九年。
- (18) 前掲15山本論文「尾張藩『御文庫』について(一)」。
- (19) 「寛政目録」では、「御時代不詳御書籍」について「瑞龍院様御代之御書物三冊も可有御座哉ニ奉存候」と、光友(瑞龍院様)蒐集の書物である可能性を指摘しており、その推定によるのか『東西御文庫入記』(請求番号一四八一九六)では、本書が寛政十一年段階では「瑞龍院様御本」の「北之方三之御棚」に蔵されていることを記載している。なお、『史異編』は「源敬様御書物」の「西四之御棚」に記載されている。
- (20) なお、『史異編』に含まれるものとは別に蓬左文庫には『天元玉曆祥異図説』(請求番号一一九一一八)が現存し、「天明二年目録」にも「祥異図説 唐本 二冊」と記載されている。
- (21) 「安永九年目録」に「享保六年丑十一月御本丸ヨリ出ル御書物」とある「雲氣書 同(写本) 二部 六冊」が収載されているが、この書が具体的に何を指しているのかは不明である。名古屋市蓬左文庫監修『尾張徳川家蔵書目録』第三巻、ゆまに書房、一九九九年。
- (22) 但し、「写本」という記載は、中国大陸における写本との意味であると考えられ、そうした意味では、「唐本」であったと認識していたと考えられる。
- (23) もちろん、中国大陸で製作されたものの中にも「五つ目綴」の本はある。但し、『天元玉曆祥異賦』の伝本が現在も韓国に所蔵されており、また、日本にも多くの朝鮮本が伝存していること、そしてそれらがみな「五つ目綴」であるため、以下で検討するのである。他に、本書表紙には朝鮮本に見られる文様が押刻されているように見えるが、確かなことはわからない。
- (24) ちなみに、『天文図象玩占』の名は見えない。
- (25) 金時徳『唐四柱』試論―中国・日本の文献との書誌学的な比較によって―(『シノボジウム』「絵入り占本の国際的比較研究」報告書、慶應義塾大学戦略的研究基盤形成支援事業、二〇一二年)。
- (26) 藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究・集部』前言(京都大学学術出版会、二〇〇六年)。
- (27) 前掲26藤本著。
- (28) 本文で掲げた「寛政目録」の『史異編』の項目で「赤表紙」と記されている。そのため、改装にあたって同系色を選択したのかもしれない。
- (29) 調査したのは、以下の諸本である。『観象玩占』(請求番号一〇一〇二。明。鈔本)、『玉洞金書靈課』(請求番号六二一九六。明。鈔本)、『重刻天文秘畧』(請求番号一五六一四五。明)、『万曆四十三年序』、(版本)、『新鐫翰林評選歴科四書伝世輝珍程文』(請求番号一五七一一九。明)、『万曆二十五年序』、(版本)、『困知記』(請求番号一六一一四。明)、『天啓三年』、(版本)、『王門宗旨』(請求番号一五六一七〇。明)、『万曆十三年序』、(版本)、『祝子罪知録』(請求番号一六一一七。明)、『万曆四十年序』、(版本)、『遜志齋集』(請求番号一六九一六。明)、『万曆四年重刊序』、(版本)、『仏祖歴代通載』(請求番号一〇四一三四。明、版本)、『新刻校正古本大字音釈三國志伝通俗演義』(請求番号一八一。明)、『万曆中』、(版本)。
- (30) 「禁中へ御借シノ御書籍之覚」『慶安四年御書籍払帳』(名古屋市蓬左文庫監修『尾張徳川家蔵書目録』第一巻、ゆまに書房、一九九九年)、『天明二年目録』、『御書籍目録(寛保三年改)』(請求番号一四八一四三)。
- (31) 作成時に四冊本として作成されたか(つまり、原『天文図象玩占』とは別に、本書第二冊・第三冊部分が作成されたか)は不明であるが、日本に入ってきたときには四冊本と認識されていたであろう。
- (32) 残念ながら現在の状態では改装したのかどうかの形跡を見いだすことはできない。そのため、本書が朝鮮本である可能性は残されており、本稿はそれを完全に排除するものではない。しかし、本書を実見すると、第一冊だけ紙が少し黄ばんでいることに気づく。これが作成当初からのものなのか、それとも日本伝来以降に傷んだものなのかは明らかにし難い。もし、後者であるならば、第一冊の傷みにより、表紙が付け替えられた可能性はあるのかもしれない。また、第一冊に不自然な穴が空いている。真ん中の綴じ目(五つ目のうちの三番目)のやや左上にその穴はあり、その穴は「歯足俱見」(十九ウ)まで続いている。恐らくこれは、綴じ目をつけようとした痕であり、通常よりも中よりに開けてしまったため、図案の部分にかかってしまい、ここでの綴じを諦めた痕なのではないかと思われる。このことが改装の証拠となるわけではないが、付言しておく。
- (33) 現在(二〇一三年十二月)、保存状態に問題があり、原則原本閲覧不可となっている。

附・名古屋市逢左文庫藏『天文図象玩占』全文翻刻

【凡例】

・下文の占文のみを翻刻した。
・文字は基本的に底本に忠実に示しているが、異体字は任意に直した。
・句読点は筆者が任意に付した。

【第一冊】

(外題) 天文圖象玩占 共四

(見返) 此卷前後共五十五葉

(一才) 御製序

在天之五行、在人為五事。五事脩則休徵應、失則咎徵應。天人感應之機神矣。惟天心仁愛人君、常示變以警之。惟君明必敬天子所、示警、皆有惕厲修省之誠、未嘗忽也。此編明于天人之際審矣。朕嗣承天序、祇若天道。動靜云為、恒慎諸此。股肱大臣與國同休戚相均。今各以戒、非惟使達夫吉凶之機、亦庶幾燮理之助云。

序終

(一ウ) 天文圖象玩占

日為太陽之精、光明盛實而當盈、布照四方君之象也。洪範傳曰、日者天之象也。君父夫兄之類、中國之應。有周礼十輝之象。皆見太陽之旁。侵・象・觜・監・闇・菅・弥・序・躋・想。

侵氣、侵淫相侵。侵者陰陽五色之氣。浸淫相侵、抱珥皆玦之、属虹西短、皆為侵。

象氣、成其形象。象者雲成形象、如赤鳥夾日以飛之類。
觜、如童子所佩之觜。々者日旁氣刺日、形如童子所佩之觜。

監、乃雲氣臨日上。監者雲氣在于日上。

闇者、日月食之而日或脫光。闇者日月食之、或脫光。

(二才)

菅、則日無光而菅。菅昏暗、菅者菅、々不光明也。
弥、謂白虹貫日而弥天。弥者白虹弥天而貫日。

序、謂冠珥重疊而相向。序者氣如山而在日上。又云、冠珥皆瑤重疊次序于日旁。

躋、暈虹而朝躋于西。躋者雲氣也。或曰、虹詩所謂朝躋于西是也。
想、思想而似如何狀。想謂氣五色有形象。青飢、赤兵、白喪、黑憂、黃熟。或曰、想者思也。赤氣為人狩之、形可想而知其吉凶。

會輯書目及各家占在于下卷之終

(二ウ) 天文圖象玩占目錄

日之瑞應一十一占

日之應氣 瑞異 祥光 燭耀 熒煌 二慧 重光 黃氣 青雲 龍鳳

抱日 黃人守日

日之凶變二十四占

黑氣蔽塞 過中光暗 日未入無光 日已出光暗 色赤如緒 色赤如血

無雲光暗 雲尽赤無光 平分再出再沒 日消小

(三才)

日隕至地 日闕 星月晝見 飛星犯日 妖日宵出 衆日並出 當晝明

暗 日中黑氣 齒足俱見 日月並出 日氣黑色 日氣青色 日氣色黃

日氣色黑

日旁異氣三十六占

青龍守日 黑氣如人 赤雲如輪 雲如虎躡 氣如冬株 如人持牽 青

氣如馬 氣青如鷄 氣似斧鉞 青氣如杵 赤氣如血 氣如席布 赤氣

如牛 青氣如人 雲氣如車 青氣占 氣如人頭 直氣占 交氣占 黑

雲貫日

(三ウ)

氣如死蛇 氣如二鳥 氣如龍形 氣如旗 雲氣如箒 白氣扶日 赤

氣如三鳥 赤雲如鷄 雲氣如箭 雲氣如交蛇 曲雲向日 氣青黃赤白
氣如蛇 赤雲在上 氣雲交貫 雲氣如蛇交貫

日旁雜氣一十八占

左右抱氣 左右背氣 兩珥占 直氣 三珥 四珥占 交氣 玦氣 格

氣 紐氣 纓氣 戴氣 承氣 冠氣 負氣 履氣 戟氣 捉氣

暈珥一十三占

(四才) *空白

(四ウ)

半暈兩珥 半暈向上兩珥 半暈重半暈 重半暈下珥 上下連環四珥

日暈連環四珥 暈不合珥 重半暈珥 左上角珥 右下角珥 日上重々

半暈珥 日下重半暈珥

天文圖象玩占目錄畢

(五才) 日之應氣

洪範傳曰、日者天子之象也。君父夫兄之類、中國之應。乾坤寶典曰、光明外發、魄體內全、匿精揚輝、圓而常滿、此人君之德也。晝夜有節、循度有常、春生夏養、秋收冬殺、人君之政也。

(五ウ) 瑞異

宋志曰、君德應于天、上下和平、則舍王字。日中有王字也。

(六才) 祥光

宋志曰、人君德政皆德、則色精明揚光、光異于常光也。

(六ウ) 燭耀

宋志曰、聖人在上、群賢履職、乘土德旺、其政太平、則五色。其五行之色備具、燭耀不主于一也。京房曰、聖人在上、寅亮天工、則日之光明五色備具。

(七才) 熒煌

宋志曰、人君有德、天下大豐、則有彗。々者光芒出如彗四出也。

(七ウ) 二彗

宋志曰、天下大慶、一歲再赦、則有二彗。

(八才) 重光

宋志曰、有封禪之慶、則重。々有光而其外一重赤、是謂重光也。

(八ウ) 黃氣

宋志曰、人君宮中有喜、則其上有黃氣潤澤也。

(九才) 青雲

宋志曰、舉賢良于國、則有青雲潤澤于西北。

(九ウ) 龍鳳抱日

宋志曰、君聖臣賢、天下順心、則氣如龍鳳龜鶴形、圓而抱之也。

(十才) 黃人守日

宋志曰、外國入貢、則有二黃人守之。

(十ウ) 黑氣蔽塞

宋志曰、日火不明、上下蔽塞、群臣恣而專刑。

(十一才) 過中光暗

宋志曰、日過中時無光、德政不明也。臣擅專權。

(十一ウ) 日未入無光

宋志曰、日入亭、々無光、曰、日死。又曰、朔日紫色、占、為喪、為侯王死。

(十二才) 日已出光暗

宋志曰、日出兩竿亭、々無光、曰、日病。又曰、黃色無光占、為侯王病。

(十二ウ) 色赤如赭

宋志曰、日赤如火光、或如赭色、大將戰死。武密占曰、主負于臣、百姓怨、而天下旱。

(十三才) 色赤如血

宋志曰、日赤如血、其下有喪、及叛、國亂、災癘、盜賊並起。

(十三ウ) 無雲光暗

宋志曰、日當晝無雲而光暗、是謂晝昏。陰反陽。臣叛君、奸臣盛。法令不行。又、為殺戮死亡之兆。若雜以殺氣寒濁者、大咎。其下分十三日內

有雨、不占。

(十四才) 雲盡赤無光

宋志曰、天下雲盡赤、日色無光者、有兵。

(十四ウ) 中分再出再沒

宋志曰、日中分、或出非其所、再出再沒生、其下亡土。

(十五才) 日消小日中鳥燕見

宋志曰、日消小、其下君長凶。開元占曰、消小、則奪威勢也。日中鳥見、

主不明為政亂。國有白衣會、將軍出旗旌舉一去、其下國分凶。若出軍遇

之、將軍敗亡。日中見飛燕、其下君長凶。

(十五ウ) 日隕至地

宋志曰、日隕至地、其下失政。古今占曰、日隕于地、天下鼎立也。又曰、

鼎有三足、日隕于地、有三王爭立天下。三者數之極也。故言天下鼎立也。

(十六才) 日闕

宋志曰、日闕者、別有假象。共日體相凌、離而復合、合而復離日、為失光、

乍明乍暗。或鳥體俱見、在于食時之前、晡晚以後者、為日闕。々者、兩

競之象、天子惡之。夷狄兵盜賊俱起。乙巳占曰、日中鳥不見、不謂之闕。

(十六ウ) 日月晝見

宋志曰、月與大星並晝見、是謂爭明。大國弱小國強、有立侯王。日無光

而星明有光者、國邑天子不能制。

(十七才) 飛流犯日(飛星自上而下、流星自下而上)

宋志曰、飛星流星犯日、若日映而赤色向日而流者、天子改政、國不安、

而民流、土荒。彗日、王者惡之。映日前銳後方、下有反當臣、宮室不安、

天下振動。若日無光、民疫死。

(十七ウ) 妖星宵出

宋志曰、日夜出、名日陰明、天下兵起、臣下陵上、洪水流行。日月並夜

見者、天下分亂。尚書金櫃曰、日夜出、綱紀絕滅、大臣專權。威權奪。

無救、則大臣弑其主、奪其邦、其救也。親仁賢退、驕臣慎、四時布恩惠、

赦天下、則日夜出、不為傷也。開元占曰、五留大亂、天命殛之、妖星宵出。

(十八才) 衆日並出

宋志曰、兩日並出、天下用兵、無道者亡。又曰、是謂陽明。假主抗衡、並爭、

則其下國亂。三日並不過三旬、諸侯爭。衆日並出、天下分。若兩軍相當、

數日並出。衆日者、其象似日而非日也。淮南子、堯之時、十日出、焦禾

稼草木而民無所食。堯乃使羿射十日、九鳥皆死墜其翼。

(十八ウ) 當晝明晦

宋志曰、日晝昏行人無影、到暮不止者、為刑急。又曰、不出一年、有大水。

晝昏而群鳥鳴、失政分土。洪範傳曰、日正晝而暗晦者、陰反為陽、而臣

反制君也。

(十九才) 日中黑氣

宋志曰、日中黑子者、察天不順之異也。黑氣者、亦、為日薄。皆陰也。

若年三年五、則臣有謀。又曰、臣蔽主、不明所致也。黑子若黑氣、年三

年五、臣謀。君為亂爵賞不平。太公曰、日中有氣、若一若二至四五者、

教令不明。三宮、為亂爵賞不平。

(十九ウ) 齒足俱見

宋志曰、雲間日影屬地者、為足。赤者、有舉兵。白者、有敗將破軍。日

有齒足、其下叛。春秋感精符曰、夷狄並侵、戰用將、則日垂舉足。

(二十才) 日月並出

宋志曰、日月並出、國分、兵起。若相去尺寸、臣叛而謀上。又曰、日月

並照、日光不盛、月獨盛、皆為后妃擅權。又曰、日月並晝見、起兵臣叛。

洪範傳曰、越國之亡也。日月並出、其後越滅、臣欺其君、夷狄侵中國也。

(二十ウ) 赤色占

宋志曰、日之色赤、則無智。京房曰、發號施令、動害百姓、日應之而赤。

(二十一才) 青色占

宋志曰、日之色青白、則君弱。京房曰、人君軟弱、海內皆貧、則日色青而白。

(二十一ウ) 黃色占

宋志曰、日之色黄、君聞善不與。京房曰、賢者之言、行之而蔽其人、有其美、以自揚厥異、色黄。

(二十二才) 黑色占

宋志曰、日之色黑、則君惡見于民。京房曰、臣不能進、見于君、怨惡百姓、則日黑。

(二十二才) 青龍守日

宋志曰、黑氣如龍銜日、有叛臣。若色青而守日、臣有謀。亦、戒酒膳。扶日、亦如之也。

(二十三才) 黑氣如人

宋志曰、日中有雲如人、或黑氣如人、臥背、若在傍者、皆為叛臣。

(二十三才) 赤雲如輪

宋志曰、赤雲扶日、或曲如輪在日傍、名曰提。皆為兵起、失地。

(二十四才) 雲如虎躡

宋志曰、雲如虎躡在日下者、大將叛。

(二十四才) 氣如冬株

宋志曰、氣如冬株在日傍、兵起、客勝。一曰、冬株、又曰、冬樹。

(二十五才) 如人持牽

宋志曰、如人所持如人牽在日下者、其下臣叛。

(二十五才) 青氣如馬

宋志曰、雲如青馬向日下者、或兩青鳥相向在日下者、人主有憂。

(二十六才) 氣如青鷄

宋志曰、氣如青鷄相向日下者、人主有憂。

(二十六才) 氣如斧鉞

宋志曰、如斧鉞在日側旁者、君憂。

(二十七才) 赤氣如杵

宋志曰、赤雲氣如杵截日、萬人死。又曰、雲如杵長丈餘、來衝者、君惡之。

(二十七才) 赤氣如血

宋志曰、赤氣覆日如血光者、大旱、民流千里。

(二十八才) 氣如布席

宋志曰、氣如布席掩日、兩軍相當、其下大戰。若色白在日傍、尤甚萬人死。

(二十八才) 赤氣如牛

宋志曰、赤氣如牛守日、其下有兵。色赤扶日、亦如之。

(二十九才) 青氣如人

宋志曰、青氣如人垂衣在日下、為天子之氣。

(二十九才) 雲氣如車

宋志曰、日始出有雲如車蓋、則必雨也。

(三十才) 青氣占

宋志曰、青氣在日上下者、吉。可出軍。

(三十才) 黑雲貫日

宋志曰、日出、及日欲入黑雲橫貫之、不出三日、有暴雨。日始出而隔、其下有兵、有雨、則解之。

(三十一才) 直氣

宋志曰、日傍有氣直立、或貫日者、宮中有爭鬪之事。

(三十一才) 交氣

宋志曰、氣如交蛇在于日旁者、其下有賊遊之。

(三十二才) 氣如人頭

宋志曰、氣如人頭旌旗在日旁、為兵戰。甘德曰、日傍氣如人頭、流血之象。乾象新書曰、日旁氣如旌旗者、有兵流血。

(三十二才) 氣如死蛇

宋志曰、赤氣死蛇在于日下者、大飢疫。

(三十三才) 氣如二鳥

宋志曰、赤雲如鳥夾日而飛、主君憂。

(三十三才) 雲氣如龍

宋志曰、雲如龍在于日上下、主有風雨之候。

(三十四才) 氣如旗

乾象新書曰、日旁氣如旌旗、有兵流血。

(三十四才) 雲氣如箒

宋志曰、赤雲如箒夾日、或兩頭銳在日旁、其下不利先舉兵。

(三十五才) 白氣扶日

宋志曰、白雲廣二尺在日左右、其分、兵起、國憂也。

(三十五才) 赤氣如三鳥

宋志曰、赤雲如三鳥啄日者、必有兵起。

(三十六才) 赤雲如鷄

宋志曰、赤雲如雄鷄在于日上、不出三月、兵喪。

(三十六才) 雲氣如箭

宋志曰、氣如箭外內于日下者、不出三月、兵出。又曰、三年。

(三十七才) 氣如虎

乾坤寶典曰、日旁氣如伏虎守日、大將謀亂也。

(三十七才) 曲雲向日

宋志曰、赤雲曲向日、不出三日、有自立侯王。

(三十八才) 氣青黃赤白

宋志曰、赤白青黃氣刺日、其分、有兵喪。

(三十八才) 雲似虹

宋志曰、赤雲如虹與日俱出、所歸國分、有兵憂。

(三十九才) 赤雲在上

宋志曰、日未出而有赤雲見于日上、君側有佞臣。

(三十九才) 雲氣交貫

宋志曰、氣相貫于日傍者、將不和、有背主者。白、則其下君長凶。

(四十才) 雲氣如蛇

宋志曰、雲如蛇貫日、青、則疫五穀傷。赤、則有叛。黃、乃為之交兵。白、為起兵。黑、則多雨。

(四十才) 左右抱氣

宋志曰、氣黃曲向日、為抱。當有子孫喜。臣下忠。鄰國來降。晉志、日旁氣如半環向日、為抱。乙巳日、若兩軍相當、則為和解也。

(四十一才) 左右背氣

宋志曰、形曲向外、則為背。々叛乖逆之象。示其下有反者。天文錄曰、氣大者、為背。小者、為玦。

(四十一才) 一珥

宋志曰、一珥有氣在日旁、為喜。兩軍相當、欲和解所在分、無軍為拜將也。

兩珥

宋志曰、兩珥者、氣圓小而在日左右、主壽考。珥常扶日、如民不失天常。

王朔曰、日珥等、兩軍相當、無相柰何也。

(四十二才) 直氣

宋志曰、長丈餘直立者、旁為直氣、則下有自立者。乙巳占曰、其分有自立王者。

(四十二才) 三珥

宋志曰、三珥、其色黃白、女后有喜。黃、喜。白、喪。赤、兵。青、疾。黑、水。

(四十三才) 四珥

宋志曰、四珥、天子有子孫之慶。或立王。京房曰、日朝五珥、國憂、兵起。多珥、必有大咎。甘氏曰、日有六珥、命曰大提。其分有喪。

(四十三才) 交氣

宋志曰、狀類兩直相交淫悖、亂之象。乙巳占曰、人主有悖之行、則有此氣。開元占曰、交者青赤如暈狀、或如合背、或正直交者、交也。兩氣相交也。或相貫穿、或相悖交。主內亂。軍中不和所致也。

(四十四才) 玦氣

宋志曰、形似背中有肢骸類山字、則為玦。見、則君不和、上下玦傷。天文錄曰、氣小者、為玦。大者、為背。乙巳占曰、兩軍相當所臨者、敗軍

必戰。

(四十四才) 直格氣

宋志曰、氣青赤橫在日上下者、為格。格鬪之象也。

(四十五才) 紐氣

宋志曰、氣小而圓一二在日下左右、為紐氣。又云、曲双垂背、為紐。々

氣者、喜氣也。乾坤寶典曰、人君將有紐、女寵進幸之象也。

(四十五才) 纓氣

宋志曰、氣小在日下而曲向上者、為纓氣。得地喜也。

(四十六才) 戴氣

宋志曰、氣橫在日上形直而其上微起者、為戴。々者、德也。推戴福佑之

象。主國有喜。人君德至于天、則有之。古今占曰、小降曲而曰戴。天文

錄曰、氣在日上、大曰戴、小曰冠。所臨之分當、主進爵、分立侯王。鮮

明黃潤、為吉。純青白黑、為凶。

(四十六才) 承氣

宋志曰、氣小如半暈狀在日下、為臣承君也。又曰、日下有黃氣三重。若

抱名曰、承福。人君有喜、且得地。乾坤寶典曰、君臣相承、主有喜也。

又曰、日下有氣承之、不出其年、將帥有攻城、得地之喜也。

(四十七才) 冠氣

宋志曰、氣抱在日上者、為冠氣。主冠帶之象。當主王侯封建親戚、國當

有喜。天文錄曰、氣小者、為冠。

(四十七才) 負氣

宋志曰、氣小如半暈狀在日上、為負氣。為得地之喜。又曰、未出而日上、

有黃氣如半暈、人君有德。

(四十八才) 履氣

宋志曰、氣如履、或直立在日下、皆為履氣。主内外安寧。

(四十八才) 戟氣

宋志曰、長而斜倚日旁、則為戟。戈戟相傷。

(四十九才) 提氣

宋志曰、氣如赤雲類珥而長、為提氣。有兵亡。晉志曰、氣形三角在日四

旁、為提。一曰、日旁氣如車輪、亦、主兵興。

(四十九才) 半暈兩珥

宋志曰、主有大風雨。七日無風雨、海中兵起。

(五十才) 半暈向上及兩珥

主有大風急。無風雨、則有兵起。

(五十才) 上重半暈及兩珥

主有風雨。無、則兵亦興之。

(五十一才) 下重半暈珥

主有大風雨。無、則主有暴兵。

(五十一才) 上下連環四珥

主有喜。亦、主南北有兵。日暈四珥鮮明、亦、同占之。

(五十二才) 日暈東西連環四珥

主東西兵起。亦、主喜也。

(五十二才) 上重半暈珥

主天下有大風雨。無風雨、則有北軍大戰。

(五十三才) 下重半暈珥

主天下有大風雨。無、則主有南軍大戰。三日內有風雨、則解之。

(五十三才) 暈不合珥

主有大風雨。無風雨、主有海中兵起、則乱。

(五十四才) 重半暈珥

主有大兵。三日內有風雨、則解之。若大戰軍勝。

(五十四才) 左上角珥

主東北方軍勝戰之、則吉。

右上角珥

主西北方軍勝戰之、則吉。

下珥

主南軍勝戰之、則吉。此為三占非一象之占。

(五十五才) 左下角珥

主東南方軍勝戰之、則吉。

右下角珥

主西南方軍勝戰之、則吉。

上珥

主北方軍戰勝。此為三占非一象之占。

(五十五ウ) 四珥

宋志曰、四珥、天子有喜、有子孫之慶、或立王。京房曰、日朝五珥、國憂、兵起。多珥、必有大咎。甘氏曰、日有六珥、命曰大提。其分有喪。

【第二冊】

(外題) 天文圖象玩占 共四

(一才・遊紙) 箱三百二番 寫本 天文圖象玩占四冊

(二ウ・遊紙) 六十一頁

(二才) 雲氣入紫薇垣占

荊州占曰、有雲氣如鷄雛出、此子孫之氣。赤黃氣潤澤入、天子有喜。黃白氣如旗起人、主壽。如杯破碗入、有璧玉喜。白氣出、有喪。黑氣入、有兵。

(二ウ) 雲氣入北極占

天文錄曰、北極北辰最尊者也。其紐星天福也。黃白氣入、兵起。黑氣入、大人憂。黃白氣如禽獸類走、如飛鳥之人神氣、有喜。

(三才) 雲氣入鈎陳占

樂緯執圖微曰、鈎陳、主後宮。黃白氣出、不戰兵在外者罷。赤氣出、將功。蒼白黑氣入、皆主大司馬憂。

(三ウ) 雲氣入天皇大帝占

天文錄曰、天皇大帝、其神曰、耀魄寶也。主天文象。黃白氣入、有喜、出則改主王者。

(四才) 雲氣入四輔占

天文錄曰、四輔星佐也。黃白氣出、將相有喜。黑氣入、有病。

(四ウ) 雲氣入五帝內座星占

天文錄曰、五帝內座在華蓋之下、黃氣入、君有喜、當立宗廟。氣入不出六十日、太子即位。

(五才) 雲氣入天柱星占

天文錄曰、天柱、主建政教。赤黃氣入、天子喜、封廟陵事。氣出、天子受喜、三公受爵。黑氣入、將相死。

(五ウ) 雲氣入六甲星占

天文錄曰、六甲、主分陰陽化時節。黃雲入、術士興。蒼白雲氣入、太史官受賜。

(六才) 雲氣入御女星占

天文錄曰、御女、主御妻之象也。白黃氣入、有子孫喜。黃氣入、后妃受賜。蒼白氣入、后宮多病。

(六ウ) 雲氣入女史星占

天文錄曰、女史、主婦人之微者、主傳漏。黃白雲氣入、女史有喜慶。

(七才) 雲氣入柱史星占

天文錄曰、柱史、古者、有左右史記事、此之象也。黃氣入、君賜爵祿。蒼白氣入、左右史死。黃白氣入、柱史遷。

(七ウ) 雲氣入大理星占

天文錄曰、大理、評斷刑獄。黃白氣入、有赦刑罰之官、受遷。黑氣入、決獄不平刑罰官、受黜。

(八才) 雲氣入陰德星占

天文錄曰、陰德、主周給賑撫。黃氣入、天子有喜、諸侯受賜。黑青氣出、天子憂之。

(八ウ) 雲氣入天牀星占

天文録曰、天牀、主寢舍燕休。赤黃氣入、天子有喜。黃氣出、后宮有子孫之喜。白氣入、君不安。青氣入、君有憂。

(九才) 雲氣入華蓋星占

華蓋如蓋狀所以覆蔽帝座。黃氣入、天子有喜。赤氣出、侯王受賜。

(九ウ) 雲氣入傳舍星占

天文録曰、傳舍、主客館舍。黑氣入、胡兵侵中國。

(十才) 雲氣入華蓋占

天文録曰、華蓋如蓋狀所以蔽覆帝座。黃氣入、天子喜。赤氣出、侯王受賜。

雲氣入八穀星占

天文録曰、八穀、主歲豐儉。黑氣入、萬物不收大荒儉。

(十ウ) 雲氣入文昌星占

天文録曰、文昌、天之六府也。黃雲氣入、三公受賜。蒼白氣入、將相憂。赤黑氣入、三公黜。

(十一才) 雲氣入天牢星占

天文録曰、天牢、主貴人之牢也。黑氣大圓長三四尺出、貴人親屬有憂。

(十一ウ) 雲氣入勢星占

天文録曰、勢星、主助宣王命內常侍官。黃白氣入、中官受賜。赤氣入、中官叛。黑氣入、中官憂。

(十二才) 雲氣入北斗星占

天文録曰、北斗七政之樞機也。有五綵雲氣入、天子立太子。赤氣覆之。

黃氣入、君喜。黑氣入、民憂。赤氣入、宮廟火災。黑氣如禽獸狀入、虜

入塞。

(十二ウ) 雲氣入天理星占

天文録曰、天理、主執法之官。赤氣入中、兵起、將相行兵。

(十三才) 雲氣入相星占

天文録曰、相星、主總領百司而掌邦教。黃氣入、諸侯有喜。

(十三ウ) 雲氣入太陽守星占

天文録曰、太陽守、主大將大臣之象。黃氣入、大臣受賜。蒼白氣入、將軍戰死。赤氣入、宰相憂。

(十四才) 雲氣入天乙星占

天文録曰、天一、主戰鬪、知吉凶。黃氣入、君臣和、萬物成、朝多賢士、

天下太平。黑氣入、宰相黜。

(十四ウ) 雲氣入太乙星占

天文録曰、太乙、主風雨水旱兵饑。黃白氣入、百官受賜。赤氣入、兵革

遍野。蒼白氣入、民多疫疾。

(十五才) 雲氣入天棓星占

天文録曰、天棓、主分爭與刑罰。蒼白氣入、兵起將死。黃白氣入、臣有

拜賜。黑氣入、大人憂。

(十五ウ) 雲氣入玄戈星占

玄戈、主胡兵。黑氣入、胡兵進。白氣入、胡人疾疫。

(十六才) 雲氣入太微垣占

天文録曰、太微垣、三光之庭。黃白氣入有光、人主益壽。黃氣如帚入、

有婦人喜。赤黃氣入、天子有劍喜、氣如獸入、天子用獸賜諸侯。白氣如

杯椀入、有璧玉喜。若青黑赤氣入、皆有憂。

(十六ウ) 雲氣入東西掖門星占

天文録曰、左掖門在端門東、右掖門在端門西。若左右掖門有黃氣入、天

子喜。蒼白氣出、有喪事。青氣入、有兵事起。黑氣入、有憂。

(十七才) 雲氣入五帝座占

天文録曰、五帝座在太微垣中。黃氣入、天子有孫喜。青赤氣入、近臣有

謀。蒼白氣入、有喪事。

(十七ウ) 雲氣入幸臣星占

天文録曰、幸臣者親愛之官、常常侍太子。青赤氣出、五帝座入幸臣中、

不出六十日、近臣謀。君氣不明者不成、氣明者成。

(十八才) 雲氣入太子星占

天文錄曰、太子者帝之儲也。黃氣入、太子喜。黑氣入、太子憂。

(十八ウ) 雲氣入後官星占

天文錄曰、從官、主疾病巫人。黑氣入、受戮。黃氣入、巫人受爵。

(十九才) 雲氣入郎位星占

天文錄曰、哀鳴郎位也。黃氣入潤澤、中郎受賜。黑氣入、中郎雙死。蒼

白氣入、中郎為亂。赤氣入、中郎兵起。

(十九ウ) 雲氣入三台星占

天文錄曰、三台者、在人曰三公。黃氣入、將相有喜。黑氣入、三公憂。

蒼白氣入、三公黜。

(二十才) 雲氣入五諸侯星占

天文錄曰、五諸侯、主刺舉戒不虞。蒼白氣入、諸侯有喪。

(二十ウ) 雲氣入天市垣占

天文錄曰、天市垣、天子之市、天子之所會也。黃白氣入、繒帛常集天子、

市中有神氣如奇物入、天子喜。黃白氣入、萬物賤。蒼黑氣入、萬物貴。

赤氣入、市中有火災。

(二十一才) 雲氣入貫索星占

天文錄曰、貫索、主賤人之牢也。蒼白氣入、天子亡地。赤氣入、兵起。

黑氣入、獄多枉死。黃氣入、天子喜。

(二十一ウ) 雲氣入女牀星占

天文錄曰、女牀、主後宮女御也。黃氣入、後宮有福。白氣入、有喪。黑

氣入、有死者。青氣入、宮女多疾病。

(二十二才) 雲氣入角宿星占

晉書曰、角宿、為天門。左角為理、主刑。右角為將、主兵。有蒼白氣入

左角星、兵敗出。右角星、戰有憂。

(二十二ウ) 雲氣入庫樓星占

天文錄曰、庫樓兵庫之府。有赤氣千尋、天子自將兵。

(二十三才) 雲氣入亢星占

晉書曰、亢宿、為天子之內朝廷也。有雲氣入、民主饑疫。

(二十三ウ) 雲氣入折威星占

天文錄曰、折威、主斷獄。黃白氣入、有和親、天子喜。蒼白氣入、大臣

為亂。黑氣入、天子惡之。

(二十四才) 雲氣入攝提星占

天文錄曰、攝提、為樞擁夾帝座。黃氣、公卿受賜。青氣入、九卿憂。赤

氣入、戈楯用。黑氣入、大臣死。

(二十四ウ) 雲氣入大角星占

天文錄曰、大角、天王座也。青氣入、千尋如搶衝過者、殿梁折。青氣掩、

君憂。白氣、有喪。黃氣出、國有喜。

(二十五才) 雲氣入氐宿星占

晉書曰、氐宿、為宮后妃之府也。蒼白雲入、疾疫流行。黑氣入、大水。

(二十五ウ) 雲氣入招搖星占

天文錄曰、招搖、為天庫。蒼白氣入、相死。赤氣入、兵亂。黃氣入、兵

罷。白氣入、大人憂。

(二十六才) 雲氣入梗河星占

天文錄曰、梗河、主鋒鏑不虞。赤氣入、有大戰。蒼白氣入、將死。

(二十六ウ) 雲氣入騎官星占

天文錄曰、騎官、天子宿衛之士也。蒼白氣入、騎官死。

(二十七才) 雲氣入房宿星占

晉書曰、房、為明堂布政之宮。黃雲如人入者、后妃有娠。赤氣入、兵起。

(二十七ウ) 雲氣入心宿星占

晉書曰、心宿、為天王之位也。青氣入、天子使諸侯。赤氣入、太子受賜。

(二十八才) 雲氣入積卒星占

天文錄曰、積卒、為五營軍士。主掃除。青赤氣入、大臣持政欲論兵事。

(二十八ウ) 雲氣入尾宿星占

晉書曰、尾宿、為后宮之場、后妃之府。蒼白氣入、君有故臣來。氣出、臣有亂。

(二十九才) 雲氣入龜星占

天文錄曰、龜星、主替神明定吉凶。赤氣入、卜祝官憂。

(二十九ウ) 雲氣入天江星占

天文錄曰、天江、主太陰。青氣入、車騎出。黑氣入、多雨水。黃氣入、兵罷。

黃氣出、兵出。

(三十才) 雲氣入傳說星占

天文錄曰、傳說、主后宮女巫也。主興長子孫祝祠神靈。赤氣入、女巫憂。

(三十ウ) 雲氣入魚星占

天文錄曰、魚星、主理陰陽。知雲雨之期。赤氣入、兵起、將憂。氣出、兵罷。

黃氣入、天子用事。氣出兵起。

(三十一才) 雲氣入箕宿星占

晉書曰、箕宿、亦后妃之府也。蒼白氣入、四夷內侵。黃氣入、蠻夷來賓。

(三十一ウ) 雲氣入斗宿一名南斗星占

晉書曰、南斗、為天廟丞相太宰之位。蒼白雲入、多風。赤雲入、兵起。

(三十二才) 雲氣入牛宿星占

晉書曰、牛宿、為閔梁、主犧牲。蒼白雲入、多疾疫。赤雲入、有兵攻城。

(三十二ウ) 雲氣入九坎星占

天文錄曰、九坎、主溝渠導引泉源。青氣入、天下旱。黑氣入、百川溢。

(三十三才) 雲氣入河鼓星占

天文錄曰、河鼓、天鼓也。主天子軍鼓。黃白氣入、天子喜。赤氣入、兵起。黑氣入、將死。青氣入、將憂。

(三十三ウ) 雲氣入織女星占

天文錄曰、織女星、天女也。主瓜菓絲綿珍寶。蒼白氣入、女子有疾。赤

氣入、女子多死於兵。黑氣入、女子憂。黃氣入、女子有喜。

(三十四才) 雲氣入女宿女占

晉書曰、女宿、妻妾之稱、婦職之卑也。赤氣入、婦女多以兵死。白雲入、女多疾疫。

(三十四ウ) 雲氣入瓠瓜星占

天文錄曰、瓠瓜、主天子菓園也。蒼白氣入、菓多不實。赤氣入、天下菓

多實。黃氣入、天子以菓賜諸侯。黑氣入、食菓多致疾疫。

(三十五才) 雲氣入天津星占

天文錄曰、天津、主四瀆津梁。黃白氣入、天子有德令。蒼黑氣入、主大水。

(三十五ウ) 雲氣入虛宿星占

晉書曰、虛宿、為廟堂。主祭祀禱祝事。黃氣入、天子以喜起廟祠。蒼白

赤氣入、有土工蓋屋之事。

(三十六才) 雲氣入天壘城星占

天文錄曰、天壘城、主鬼方北夷之事。黃氣掩之、北夷滅、有疾疫。

(三十六ウ) 雲氣入敗白星占

天文錄曰、敗白、主敗亡、災害。黑雲氣入、人主憂。

(三十七才) 雲氣入危宿星占

晉書曰、危宿、為天市。主宗廟宮室。又、主營造受藏之事。蒼白氣入、

風雨損屋。

(三十七ウ) 雲氣入室宿一名宮室星占

晉書曰、宮室、為宗廟。又、為軍糧之府也。黃氣入、光潤如日月、天子

有男子之祥。白氣入、有喪。赤氣入、有兵起。

(三十八才) 雲氣入羽林星占

天文錄曰、羽林軍、主天軍翊衛也。蒼白氣入、后憂。黃氣入、后喜、或

受太子所獻。累氣入、諸侯惡之。

(三十八ウ) 雲氣入北落師門星占

天文錄曰、北落師門、主北方藩落。蒼白氣入、憂疾病。黑氣入、主憂。

黃白氣入、天子喜。出、中使出。

(三十九才) 雲氣入壁宿星占

晉書曰、東璧、主文章天下圖書之秘府。赤氣如日月潤澤入、男子之祥。白雲入、大人憂。

(三十九才) 雲氣入奎宿星占

晉書曰、奎宿、為天下武庫。又、主以兵禁暴橫。黃雲氣入、天子宫中有喜。黑氣入、有憂。蒼赤氣入、有受命來降者。

(四十才) 雲氣入土司空星占

天文錄曰、土司空、主掌水土事。黃氣入、土工興國移京邑。

(四十一才) 雲氣入閣道星占

天文錄曰、閣道、主輦閣之道。黃氣入、天子喜。白氣入、有急事。黑氣入、主有疾。

(四十二才) 雲氣入附露星占

天文錄曰、附露、主便閣道逕也。蒼白氣入、太僕死。赤氣入、太僕受誅。

(四十三才) 雲氣入王良星占

天文錄曰、王良星、主太子奉車御官也。青氣入、奉車御官憂、墜車。赤氣入、奉車御官、有斧鉞之憂。黃氣入、奉車御官、受賜。

(四十四才) 雲氣入婁宿星占

晉書曰、婁宿、主苑牧犧牲供給郊祀。黃氣入、貴人受賜。白氣入、人民受賞。赤氣入、主兵。

(四十五才) 雲氣入天倉星占

天文錄曰、天倉、主五穀所藏待邦之用。黃氣入、歲大熟。蒼白氣入、歲不熟。赤氣入、兵起、大旱、倉庫有火災。

(四十六才) 雲氣入天大將軍星占

天文錄曰、天大將軍、天之將軍也。蒼白氣入、軍多疾。赤氣入、主兵出。

(四十七才) 雲氣入胃宿星占

晉書曰、胃宿、為天子廚藏、主倉庫廩。蒼白氣入、有糶粟事。黑氣入、倉困敗穀腐。

天文錄曰、天廩、主積黍以享祀。青氣入、蝗虫大旱。黃氣入、歲多粟麥。黑氣入、多水。

(四十八才) 雲氣入天困星占

天文錄曰、天困、主給御廩粢盛。青白氣入、歲飢、民流亡。

(四十九才) 雲氣入大陵星占

天文錄曰、大陵、一曰、積京、主丘陵墳墓死喪。白氣入、有大兵喪。赤氣入、多戰死。

(五十才) 雲氣入天缸星占

天文錄曰、天缸、主道利涉。青氣入、天子不可乘御缸。黃氣入、天子乘缸、有喜。

(五十一才) 雲氣入積尸星占

天文錄曰、積尸在大陵中墓也。主死喪。蒼白氣入、人多死。黑氣入、民多疾疫。

(五十二才) 雲氣入積水星占

天文錄曰、積水、主官水供給須食。蒼白氣入、有水災。

(五十三才) 雲氣入昴宿星占

晉書曰、昴宿、為旄頭胡星也。有蒼赤氣入、人民疾疫、妖言起、胡兵入。

(五十四才) 雲氣入芻藁星占

天文錄曰、芻藁、主積藁之屬。赤氣入、有大憂。天子因火散財。黃氣入、天子財寶出。

(五十五才) 雲氣入天苑星占

天文錄曰、天苑、主天子養禽獸之苑。蒼白氣入、獸多病。黃氣入、牛馬蕃息。黑氣入、牛馬多死。

(五十六才) 雲氣入畢宿星占

晉書曰、畢、為邊兵、主戈獵。白氣入畢口、其歲大人必有生者。赤氣入、必有兵起、旱、火災。蒼白氣入、歲多收。

(五十七才) 雲氣入五車星占

天文録曰、五車、天子之五兵車舎也。蒼白氣入、民不安、多流亡。赤氣入、兵起。

(四十九ウ) 雲氣入天潢星占

天文録曰、天潢、主河津渡渉事。黄氣入、天子喜、安和、兵罷。蒼白氣、有喪。赤氣入、兵起、庫有火。

(五十才) 雲氣入天高星占

天文録曰、天高、主望八方雲氣、今觀星之臺象。白氣入、早霜害稼禾。

(五十ウ) 雲氣入咸池星占

天文録曰、咸池、主陂澤魚鱉池沼。黄氣入、有喜事。黒氣入、大水、蒼白氣入、魚多死。赤氣入、主旱。

(五十一才) 雲氣入天關星占

天文録曰、天関、主邊防道路。黄氣入、四方來貢王帛。

(五十一ウ) 雲氣入參旗星占

天文録曰、參旗、為天子弓旗也。主弓弩之候。赤氣入、西胡來侵。

(五十二才) 雲氣入天園星占

天文録曰、天園、主蔬菜之所也。有白氣入、兵起。

(五十二ウ) 雲氣入猪宿占

晋書曰、猪觶、為三軍之候。有黄雲入、兵出。黒氣入、大人憂。

(五十三才) 雲氣入天厠星占

天文録曰、天厠、為溷隱、主腰下疾。赤氣入、兵起。黒氣入、大人憂。黄氣入、天子喜。

(五十三ウ) 雲氣入井宿占

晋書曰、東井、為水衡、主法令。黄氣入、有水澤事興。赤雲入、有大水、成疾病。

(五十四才) 雲氣入積水星占

天文録曰、積水、主水官供給酒食。蒼白氣入、憂水。

(五十四ウ) * 図はあるも、項目名・占文共になし。内閣本『天元玉曆

祥異賦』は「雲氣入積薪星占」。

(五十五才) 雲氣入北河星占

天文録曰、北河、主胡門。白氣入、邊境有兵。又、主胡王死。

(五十五ウ) * 図はあるも、項目名・占文共になし。内閣本『天元玉曆祥異賦』は「雲氣入南河星占」。

(五十六才) 雲氣入水位星占

天文録曰、水位、主水衡瀉溢。赤氣入、大旱、歲飢荒。

(五十六ウ) 雲氣入狼星占

天文録曰、狼星、主野將侵掠。赤氣入、有兵革、胡人侵掠、民驚。

(五十七才) 雲氣入弧矢星占

天文録曰、弧矢、方矢也。主行陰謀以備盜。赤氣入、民驚。一日、胡人中國。黒氣入、胡人多病死。

(五十七ウ) 雲氣入老人星占

天文録曰、老人星、主壽攷。白雲掩、老人憂。

(五十八才) 雲氣入鬼宿占

晋書曰、輿鬼、主視民察奸謀。白雲入、有疾病。黒氣入、大人憂。

(五十八ウ) 雲氣入燿星占

天文録曰、燿星、主烽火備驚急。赤氣入、天下烽火動。

(五十九才) 雲氣入柳宿占

晋書曰、柳、為厨宰、主尚食和滋味。赤雲入、有失火之憂。黄雲入、有赦。(五十九ウ) 雲氣入酒旗星占

天文録曰、酒旗、主宴會觴酌。赤氣入、君以酒食。

(六十才) 雲氣入星宿占

晋書曰、七星、主衣文繡。蒼白雲入、大人憂。赤雲入、四曲五曲不止者、臣亡。

(六十ウ) 雲氣入天相星占

天文録曰、天相、大臣之象。若黄氣入、大臣喜。黒氣入、將相憂。

(六十一才) 雲氣入張星占

晉書曰、張、主珍寶宗廟。黃白氣入潤澤、天子因喜賜客。氣出、天子使諸侯。赤氣入、用丘賜物。

(六十一ウ) 雲氣入翼宿占

晉書曰、翼、為天樂府、主非佞。赤氣入、有暴兵。黑氣三夜不出、有暴兵、大人憂、兵起。

(六十二才) 雲氣入軫宿占

晉書曰、軫、主冢宰輔臣之職。黃白氣入、天子用車馬賜諸侯。黑氣如杵入、大人墮車。

(六十二ウ) 雲氣入器府星占

天文錄曰、器府、樂器之府也。赤氣掩之、音樂廢。

(六十三才) 雲氣入參宿占

晉書曰、參、為大臣、主鉄鉞斬刈。有蒼白雲入、憂災。赤氣入、内兵起。

(六十三ウ) 雲氣入玉井星占

天文錄曰、玉井、主水泉以給庖厨。青氣入、井水不可食。

【第三冊】

(外題) 天文圖象玩占 共四

(見返) 三十五頁

(一才) 木星在春季占

朱文公曰、歲星、為福、其占在春。宋志曰、歲星、乃少陽發揮之官位。居正卯與太歲更為表裏、名曰歲星。主福德東方、故春占之。

(一ウ) 木星在春變色白無光占

朱文公曰、白無光、風雨總至。宋志曰、春行秋令、則歲星變色而無光、人有天疫。颶風暴雨總至。主藜莠蓬蒿。並興國當、大水寒氣總至。寇戎來征。天多陰沈。淫雨大降。兵革並起也。

(二才) 木星在春變色赤占

朱文公曰、赤有角、旱煖早臻。宋志曰、春行夏令、則星變赤而有芒角、

雨水不時、草木早落、國將有恐、大旱、煖氣早來、蟲蝗為害、人多疫癘、時雨不降、小麥不收。

(二ウ) 木星在春變色黑占

朱文公曰、色黑、有非時之令。宋志曰、春行冬令、則星乃變黑而水澇、為災。雪霜大降、首種不成。陽氣不勝、民多相掠。寒氣時發、草木皆肅。

(三才) 木星在春青色占

朱文公曰、色青、為應候之溫。宋志曰、色青、是本色其體潤澤有芒氣、皆為福慶。

(三ウ) 木星在春初出小而後大占

朱文公曰、初出小而日益大、國利之本。宋志曰、初出小而日益大、所居國利。

(四才) 木星初出大而後小占

朱文公曰、初出大而日漸小、國耗之因。

(四ウ) 木星去其舍而所去占

朱文公曰、去其舍而所去之國、為兵、為飢、為失地之害。之他舍而所去之地、為慶、為樂、得地之忻。宋志曰、歲星去其舍而之他舍所去之國、為兵、為飢、為凶、為失地。所居之國、為慶、為樂、為昌、為得地。

(五才) 木星未當居而居占

朱文公曰、未當居而居當去而不去者、皆為福慶。宋志曰、若未當居而居當去而不去、既已去之復還而居之、皆為有福。

(五ウ) 木星未當去而去占

朱文公曰、未當去而去當居而不居者、其國凶屯。宋志曰、當居而不居未當去而去、既不居之。又、復去之在左右搖、其國屯。石申曰、其國人主有憂也。左傳曰、魯襄公二十八年、歲之在星紀而經於玄枵。梓慎曰、今茲宋鄭。

(六才) 木星所衝之方占

朱文公曰、所衝之方、乃有殃咎、所在之國可以伐人。宋志曰、盈縮以其舍分所在國、有厚德也。五穀豐昌人不可伐、可以伐人、其對為衝、乃有殃。

(六ウ) 木星有暈占

朱文公曰、若自暈、則為喪事。甘德曰、木星自生暈者、則有喪事。

(七才) 木星晝見與日争光占

朱文公曰、其晝見、則為強臣。傳曰、晝見、為強臣。占曰、歲星晝見與日争光、文弱武強。

(七ウ) 火星在夏季占

朱文公曰、熒惑、主罰于時、為夏。宋志曰、勞惑、乃火之精、為視。且以審理之道、必有審于視聽。不法、皆自熒惑變生。聖人因而名之熒惑。

一曰、罰星、主糾察南方厲火。故夏占之。

(八才) 火星在夏變色青占

朱文公曰、色青而變者、暴風損苗。宋志曰、夏令行春、則色變青。蝗虫為災、暴風為格、秀草不實、五穀晚熟、百虫時起、其國乃亂。

(八ウ) 火星在夏變色白占

朱文公曰、色白而昧者、苦雨傷稼。宋志曰、夏行春令、則其星色白而昧、苦雨數來、五穀不榮、草木零落、果實早成、民殃於疫。

(九才) 火星在夏變色黑占

朱文公曰、色黑、則電凍變生。宋志曰、夏行冬令、則其星色黑而芒、草木旱枯、水敗城郭、電凍傷五穀、暴兵來。

(九ウ) 火星在夏旺色赤占

朱文公曰、色赤、則赫曦施化。宋志曰、色赤、則赫曦施化。其本體旺者、皆為福昌。

(十才) 火星在夏赤如炬火占

朱文公曰、赤如炬火、兵喪、因亂臣小人而生。開元占曰、熒惑色赤如炬火、小人撓棺。不有亂臣、則有大喪。兵大起、先起者亡、後起者昌。

(十ウ) 火星在夏失度吐舌占

朱文公曰、失度吐舌、早火從宮殿高臺而發。開元占曰、熒惑失度、或吐舌、所以戒人君也。不救、則大旱。失火燔燒宮殿。追功錄、能辭賢任、德養幼孤、恤鰥寡、則熒惑還度、而天心得矣。

(十一才) 火星在夏季逆行二舍餘占

朱文公曰、逆行二舍之餘、或火焚、或有女災。開元占曰、熒惑逆行二舍半、有火災。一曰、有女災。一曰、有大水。

(十一ウ) 火星留以庚辛之日占

朱文公曰、留以庚辛之日、有大喪、而有戰伐。開元占曰、熒惑若以庚辛之日留者、天下有大喪、及有兵。

(十二才) 火星在夏季若反明占

朱文公曰、若反明者、為備、為主惡。宋志曰、若反明、則為水備而雨至。天官書曰、火星當出東方、其出西曰、反明。主命者惡之。開元占曰、火出西方逆行、是謂反明。又曰、入西方反出、為反明、天下更主。

(十二ウ) 火星光芒如正旗占

朱文公曰、有正旗也。為軍破將殺。開元占曰、熒惑芒、為正旗、所指有破軍殺將、順正旗而伐之大勝。

(十三才) 火星晝見自暈占

朱文公曰、晝見自暈、臣謀背於君王。開元占曰、晝見、臣謀主、自暈、大臣背其主。

(十三ウ) 火星勾已繞還逆行占

朱文公曰、燒跡成勾、大凶、旱饑、兵起。天文廣要曰、火星逆行、若復跡、名曰燒跡。大凶。旱饑、兵敗、國亡。若不復跡、名曰勾已。亦、為凶甚。

(十四才) 火星當入不入占

朱文公曰、當入不入所在宿、其國有殃。開元占曰、當入不入、國有殃。

(十四ウ) 火星當出不出占

朱文公曰、當出不出所宿、國民流、兵疫。開元占曰、當出不出、天下有兵、民多流亡。

(十五才) 土星在夏季占

朱文公曰、填星、主德占、為夏季。迹陳於外而兆、發於中居四方之中。戊己之位、萬物因之以生四氣據之而例。故星之名曰填。主厚德。安危存亡之机、以其屬土之行而動靜吉凶占于夏季。

(十五ウ) 土星在夏季變色白占

朱文公曰、變白、則水湧不収。宋志曰、夏季行秋令、則填星乃變白。主兵濕水湧、禾稼不熟。乃多女災之應。

(十六才) 土星在夏季行春令占

朱文公曰、變青、則國多風雨。宋志曰、夏行春令、則其星變色青。無芒角、五穀實鮮落。故多風人乃遷徙。

(十六ウ) 土星在夏季行冬令占

朱文公曰、色黑、為風寒不時。宋志曰、夏季行冬令、則其星變色黑。風寒不時、鷹隼早鷺四鄙入堡。

(十七才) 土星在夏季色旺占

朱文公曰、色黃、為溽蒸當位。宋志曰、皆為福慶。

(十七ウ) 土星四季失色占

朱文公曰、春不青、夏不赤、秋不白、冬不黑、並為女后有憂。宋志曰、失色而角為憂。

(十八才) 土星四季旺占

朱文公曰、春色青、夏色赤、秋色白、冬色黑、皆為女主有喜。宋志曰、依時則女后喜。

(十八ウ) 土星白而潤芒占

朱文公曰、白而潤芒角、子孫立王之慶。宋志曰、潤白而芒角、有子孫立王之慶。

(十九才) 土星在夏季色黃大無光占

朱文公曰、黃而光耀、更宮室土功之役。宋志曰、若土星色黃而光耀、更宮室而土功興。又曰、色黃無光、女后恣。又、為忿爭之事。

(十九ウ) 土星自生暈占

朱文公曰、如自暈、亦為土功。宋志曰、自暈、為土功。

(二十才) 土星生芒角占

朱文公曰、若芒角、則有爭地。宋志曰、芒角、有爭地、或旱。

(二十ウ) 土星色白素占

朱文公曰、色白、則素服將集。宋志曰、色白者、有素服、天下不安。

(二十一才) 土星色黃餌魚占

朱文公曰、餌魚、則黃帝將起。宋志曰、黃帝則起填星。餌魚、謂氣如魚形在填星旁也。

(二十一ウ) 金星在秋季占

朱文公曰、太白、兵候占之、素秋帝、主生成。故為之將、觀象察法、因為名。宋志曰、太白、其位當有少陰用事之際、萬物成實之秋帝主、故為之將大者、大將軍之應。白者金精之色。觀象察法、因此為名太白。進退以候兵、高卑遲速靜躁見、伏用兵、皆象之吉、故以秋占。

(二十二才) 金星在秋季行春令占

朱文公曰、青而昧者、陽氣復退。宋志曰、秋行春令、則其星色青而昧、陽氣復還。五穀無實、秋雨不降、草木不榮、煖風未至、人氣懈惰。

(二十二ウ) 金星在秋季行冬令占

朱文公曰、黑而角者、雷乃先収。宋志曰、秋行冬令、則其星黑大而芒角、陰氣太盛。介虫敗穀、戎兵乃來、風災數起、収雷先行、國多盜賊、邊境不寧、土地分裂。

(二十三才) 金星在秋季行夏令占

朱文公曰、色赤、則其國旱煖。宋志曰、秋行夏令、則其星色赤而怒。國多火災、寒熱不節、其國乃旱、蟄虫不藏、五穀復生、其國大水、冬藏殃敗矣。

(二十三ウ) 金星在秋季旺色占

朱文公曰、色白、則其令蕭颯。宋志曰、秋季色旺、體大色白、則其令蕭

颯如是色也。故占之吉。

(二十四才) 金星初出大而後小占

朱文公曰、初出大而後小者、兵弱之愁。宋志曰、朱文公曰、初出小而後大者、兵強有喜。

(二十四ウ) 金星失行占

朱文公曰、失行在東、中國比敗之兆。失行在西、夷狄比之兆。宋志曰、其出而失行西方、夷狄敗。失行東方、中國敗。出卯西南、々勝。出卯西北、々勝。正在卯東、國利、正在西、國利。其出四維東南西南、若在日月之陽、々國凶、在其陰吉、東北則有凶怒、有兵相攻。荊州占曰、太白出西方、常在申酉之間、失行而在北、謂反生。不有破軍、必有屠城之驗。

(二十五才) 金星當入不入當出不出占

朱文公曰、失舍、則為破軍而亡國。宋志曰、當出不出當入不入、是為失舍、為敗軍亡地。傳曰、不有破軍、必有亡國。占曰、當出不出當入不入、天下偃、兵在外而未當出而出、未當入而入、天下兵起、亡地。一曰、天下兵起、有破軍。

(二十五ウ) 金星經巳午未位占

朱文公曰、經天、則為革命而民流。天文志曰、太白少陰、曰弱、不得專行。故以巳未位至界、昏欲至未而遲、且欲至巳則疾。不合在午見、々則經天。若經天、天下變、是謂亂紀。人衆流亡、天下兵革。晉書曰、太白經天、革民更主。晉灼曰、日陽也。日出後、則星亡晝見午上、為經天。

(二十六才) 金星行盈縮曆占

朱文公曰、行縮、后族之患、行盈、將相之謀。宋志曰、夏至後、日方南而居其南、冬至後、日方北而居其北、曰盈。侯王不寧、用兵進吉、退凶。日方南而居其北、日方北而居其南、曰縮。侯王有憂、用兵退吉、進凶。出黃北、伏兵起。元命包曰、盈、則將謀。縮、則后族患。

(二十六ウ) 金星出高深占

朱文公曰、出高深入、乃吉。出卑淺入、無憂。宋志曰、出高、用兵、深

吉、淺凶。出卑、用兵、淺吉、深凶。

(二十七才) 金星行疾行遲占

朱文公曰、行疾、則速戰。行遲、則可留。宋志曰、用兵之時、以象之。行疾則疾。行遲、則遲。行有角敢戰、則吉。動搖躁則躁、靜則靜。順角所指者、吉。反之、皆凶。

(二十七ウ) 金星出西方占

朱文公曰、出西方、為刑。右之背之而得吉。宋志曰、出西方、為刑舉事。右之背之吉。

(二十八才) 金星出東方占

朱文公曰、出東方、為德。左之迎之而獲休。宋志曰、出東方、為德。左之迎之吉、及之吉。

(二十八ウ) 金星自主暈占

朱文公曰、自暈、則天下大赦、為有兵而有喜。開元占曰、自暈、則天下大赦、有兵則喜。

(二十九才) 金星晝見與日爭光占

朱文公曰、晝見、則兵喪、並起、為強后而強侯。宋志曰、晝見與日爭光、強國弱小國強、女后昌。司馬彪曰、為強臣。荊州占曰、兵大起。

(二十九ウ) 金星色赤焱然占

朱文公曰、焱然而上、兵起滿野。焱然而下、流血盈溝。宋志曰、其狀焱然而上、有大兵起。焱然而下、當有天狗所下、其野流血。

(三十才) 金星光明見影占

朱文公曰、光明見影者、歲豐、戰勝。體小而昧者、國敗、君憂。宋志曰、若光明見影者、戰勝。體小而昧者、軍敗、國憂。

(三十ウ) 水星在冬季旺占

朱文公曰、辰星、執刑於時、為冬。宋志曰、辰、乃水之精。其位當子得太陰之氣、而四象終。易有幽明之說、原始返終、即其義也。故冬占之。

(三十一才) 水星在冬季行冬令占

朱文公曰、色青、則凍閉不密。宋志曰、冬行春令、則其色青。凍氣不密、地氣上泄。民多流亡、蟲蝗為馭、水泉咸竭、人多疥癩、胎夭多傷、國多痼病。

(三十一才) 水星在冬季夏令占

朱文公曰、色赤、則流水不冰。宋志曰、冬行夏令、則其星色赤而昧。國多暴風、方冬不寒、蟄虫復出、其國乃旱、氣冥冥雷乃發聲、水湧為敗、時雪不降、凍水消釋。

(三十二才) 水星在冬季夏令占

朱文公曰、色白、則冰雪雜下。宋志曰、冬行秋令、則其星色白大而不明。霜雪不時、小兵時起、地土侵削、冰雪雜下、瓜瓠不成、國有大兵、白露早降、介虫為妖、四鄙入堡。

(三十二才) 水星在冬季旺占

朱文公曰、色黑、則寒氣嚴凝。有軍于野、占為偏將。無軍於野、占為法刑。宋志曰、水星于冬旺、黑色如是色也。主吉。有軍于野、辰星為偏、將之象。無軍於野、辰星、法刑之象。

(三十三才) 水星不以時而出占

朱文公曰、不效之國、為水旱、刑政俱失。所在之國、有權智、為主用兵。宋志曰、若刑政失簡、宗廟廢祀。不以時而出、當寒反溫、當溫反寒。荊州占曰、刑罰不中。辰星不以時出、當水反旱、當旱反水。所在之分、有權智者、為主用兵。

(三十三才) 水星當入不入占

朱文公曰、當入不入、號令廢而法律失。宋志曰、當入不入、為失法律。

(三十四才) 水星當出不出占

朱文公曰、當出不出、兵大起、而豪傑興。宋志曰、當出不出、謂之擊卒、兵大起。一云、而豪傑發。

(三十四才) 水星與金星各在一方占

朱文公曰、與太白各在一方、不戰之象。宋志曰、辰星出東方、太白出西方、

辰星出西方、太白出東方、為格對。或出與太白不相從野、雖有軍、不戰。(三十五才) 水星來抵金星占

朱文公曰、抵太白、太白不去、將死之徵。宋志曰、辰星來抵太白、太白不出、將死之徵。正旗上出、破軍殺將客勝。不出、客敗。視所指以命破軍。

(三十五才) 金星環遶水星占

朱文公曰、若環繞、若兔過函釵、若摩太白之右、為客勝、為主人吏死、為數萬人之事。宋志曰、辰星環繞太白、若與鬪太戰客勝、免過、去也。辰星去與太白間、可容一劍也。若居太白前、軍罷去。居太白前出、太白左小戰。摩太白右、數萬人戰、主人吏死。摩者、光明相反傾壞敗傷也。

(三十六才) 水星出東方色赤占

朱文公曰、在東而赤者、中國勝。在西而赤者、外國亨。無軍於野而赤、兵將起而欲征。宋志曰、若出東方大而白、有兵於外、兵解。當在東方而赤、中國勝。在西方而赤、外國利。又曰、無兵在外而赤、兵起。其與太白俱出、皆赤而角、若出東方、中國勝。出西方、外國勝。

(三十六才) 水星經天書見占

朱文公曰、書見、則其國大亂。經天、則天下大凶。宋志曰、書見、則其國必亡、大亂。若經天、則大凶、天下易主。

第五冊終記三十六葉

【第四冊】

(外題) 天文圖象玩占 共四

(見返) 六十一頁

(一才)

日旁異氣二十一占

重抱兩珥 四抱兩珥 三抱兩珥 一抱一背 背缺二氣 冠珥二氣 戴珥二氣 冠纓二氣 冠紐兩氣 抱珥重光 二背一直 一抱兩珥 戴冠二氣 戴珥二氣 冠紐二氣 冠纓二氣 冠珥背缺 背缺直交 直背二

氣 虹抱二氣

日暈一十二占

(一ウ)

日暈 半暈 日上半暈 半暈相同 半暈再重 兩半暈相合 井垣暈

方暈二背 方暈 交暈 連環暈 重暈

日暈雜氣二十五占

暈內抱珥 暈外抱珥 暈珥直虹 暈抱背 暈負二氣 暈虹貫珥 暈虹

貫珥珥 暈背二氣 暈抱珥虹玦 暈背虹直珥 暈四抱 暈抱二氣 重

暈背玦 上半暈背玦 下半暈背玦

(二才)

暈冠珥紐 暈四珥四背四玦 暈負二氣 暈白虹貫珥 暈珥 暈四背

暈抱二氣 暈背二氣 白虹貫暈 直虹貫暈

雲氣異象二占

雲氣如眼 彗星見日下

日食異氣六占

日食妖氣 日食黑氣 日食氣如鳥夾日 日食有暈珥 日食有白兔 日食四珥

(二ウ)

月旁雲氣五占

氣如人隨 雲如禽獸 雲氣如杵 月垂芒 月自天墜

月暈雜氣二十七占

月暈四珥 月暈生珥 月暈生虹 暈三珥 重暈背 月暈三重 虹霓背

玦度暈中 暈背玦四出 暈虹蜺 暈白氣 交暈 月暈兩珥 白暈貫月

連環及斗 重暈於魁

(三才)

白虹貫月暈連環 月生背暈 月抱二氣 暈月戴珥 月暈珥玦 月暈抱

珥 月暈背珥 重半暈珥 重暈兩珥 十字度(暈中) 暈日月 雜氣

俱全

雜氣俱全

抱背二氣 戴珥 背玦 四玦 四提 重半暈珥

目錄終

(三ウ) *空白

(四才) 重抱氣

開元占曰、重抱兩珥、人主有喜。暈不占。

(四ウ) 四珥兩抱氣

開元占曰、日旁有四珥兩抱、主人君子孫昌。暈無占。

(五才) 三抱兩珥

開元占曰、三抱重有兩珥、色黃白潤澤、天子有喜。是謂太和。暈不占。

(五ウ) 一抱一背

宋志曰、一抱一背、為破走。抱者順氣也。背者逆氣也。兩軍相當順抱擊、逆者勝。故言破走。開元占曰、有欲為逆、有欲為忠也。

(六才) 背玦二氣

開元占曰、日背而玦、大臣反、天子有憂。

(六ウ) 冠珥一氣

開元占曰、冠而珥、人主有喜。且有所立。

(七才) 戴珥二氣

開元占曰、戴而珥、天子有子孫喜。亦曰、人主有喜、天下和平。

(七ウ) 冠纓二氣

開元占曰、冠纓上下南北、有聖人出之。

(八才) 冠紐兩珥

開元占曰、冠紐左右兩珥、天下有喜大。

(八ウ) 抱珥重光

開元占曰、抱珥重光以見、喜。吉祥福祿並降。

(九才) 二背一直

開元占曰、日有二背一直、大臣謀、欲自立。

(九ウ) 一抱兩珥

開元占曰、一抱兩珥、天子有喜。下有黃色如月、太子有喜。

(十才) 戴冠二氣

開元占曰、戴而冠色黃白潤澤、天子有喜。

(十ウ) 珥戴二氣

開元占曰、珥有戴、人主有喜、天下和平。

(十一才) 冠紐二氣

開元占曰、冠而紐者、君兄弟婦女私相姦臣也。一云、若欲立青衣爲妻。

(十一ウ) 珥纓二氣

開元占曰、纓而珥、後宮有喜。

(十二才) 冠珥背珥

開元占曰、日有背珥而冠珥、有亂國之主。

(十二ウ) 背珥直交

開元占曰、日有背珥四直交于中、臣欲爲邪。

(十三才) 直背二氣

開元占曰、背者逆氣也。背多而直少、謀自立者必成。

(十三ウ) 抱直二氣

開元占曰、抱者順氣也。抱多而直少、謀自立者不成。

(十四才) 虹抱兩氣

開元占曰、若兩軍相當、日旁雜色、有抱者、宜從抱而擊。無抱者、當順虹而戰。氣象雖多順抱、順虹擊之、皆勝也。

(十四ウ) 日暈

宋志曰、暈氣之類、尤多。天地將交而不密、未成風雨、當爲暈。亦、軍營之象也。乾坤寶典曰、暈而周匝、軍威之氣也。暈有五色、黑暈、爲災在國事之臣。青也、大風襍、貴人多病。赤色、必有大雷雨電霹靂、或有酷暑。白色、有暴兵。黃暈、人主有喜。一曰、風雨時、農田治。數見、

則大安也。

(十五才) 半暈

宋志曰、暈而不匝、半暈所在之方、勝其軍。又曰、半而向四方、對所向之方、夷狄入中國。古今占曰、日暈不匝、作兩抱者凶。

(十五ウ) 日上半暈

宋志曰、半暈在日上如鼎蓋、有欲和親者。一曰、有兵。

(十六才) 半暈相同

宋志曰、半暈兩半者、大風。

(十六ウ) 半暈

宋志曰、半暈在重、則國民蕃息、歲大稔也。

(十七才) 兩半暈相合

宋志曰、兩半暈上下交合、主有大風雨、交戰之事。

(十七ウ) 暈井垣如車輪

宋志曰、暈如井垣車輪、二國皆兵亡。謂圓中暈有方暈也。

(十八才) 方暈上下二輩背

宋志曰、方暈非井幹者、天下不和。一曰、天下大兵。又曰、方暈上下聚二背、將敗人亡。

(十八ウ) 方暈

宋志曰、方暈如井幹、天下不和。一曰、天下大兵。

(十九才) 交暈

宋志曰、交暈如連環、則爲兩軍兵起、爭地。至日月、則兩敵相向順以戰勝。若貫日、則其下有破軍、死將。

(十九ウ) 連環暈

宋志曰、暈連環而貫日、則爲兵起相爭。

(二十才) 重暈

宋志曰、暈再重、人君有德。又曰、立侯王。一曰、攻城不克。三重暈、兵起、穀傷。四、則軍敗于野、有叛臣。五重、女后憂。六重、失政、兵喪。七

重、中國弱、夷狄盛。一曰、更主。八重、民乱君擾。九重、歲荒、夷狄侵。十重、天下大風。

(二十ウ) 暈内抱珥

宋志曰、暈内有珥一抱、圍城者、内人盛。

(二十一才) 暈外抱珥

宋志曰、暈外有珥一抱、外人勝。亦、可攻城。

(二十一ウ) 暈珥直虹

宋志曰、暈直虹珥、為破軍。貫至日、為殺將。

(二十二才) 暈抱背

宋志曰、日暈一抱一背、為敗走。又、為不和。

(二十二ウ) 暈珥二氣

開元占曰、日暈有珥、裂土為王。

(二十三才) 暈負二氣

開元占曰、日暈負者、青赤如半暈狀而暈者上也。負有位、為得地、為喜。

(二十三ウ) 暈珥虹

宋志曰、日暈兩珥而虹貫之、得二將。三虹、得三將。

(二十四才) 暈珥虹

宋志曰、暈兩珥而虹貫之、其分多疾疫。

(二十四ウ) 暈背二氣

宋志曰、暈上下有兩背、無兵、兵起、有兵、則入之。

(二十五才) 暈抱珥虹珥

宋志曰、暈而抱、且兩珥抱、至日而一虹貫之、重抱有珥、或兩珥與抱珥

而白虹貫之、五者皆順抱擊之勝。

(二十五ウ) 暈背虹直珥

宋志曰、暈有背珥直而虹貫之、或暈而虹貫之、至日、或不至日、順虹所

指、從日所擊之、則勝。

(二十六才) 暈四抱

宋志曰、天子有喜。天下和平。則暈四抱色赤黃白、皆吉、有和親。

(二十六ウ) 暈抱二氣

開元占曰、日暈而兩抱、天下和平。亦、為天子有喜。

(二十七才) 重暈背珥

開元占曰、重暈而中有兩背珥、叛從中起不成。

(二十七ウ) 半暈背珥

宋志曰、半暈有背一珥一、或暈兩傍不合背、為臣有謀不成。

(二十八才) 半暈背珥

宋志曰、半暈有一輩一珥、或暈兩傍而不合、皆為臣有謀。

(二十八ウ) 暈冠珥紐

開元占曰、日暈冠珥紐、人主有喜慶。且有所主。

(二十九才) 暈四珥四珥四背

開元占曰、日暈四珥四背四珥、臣有急事。關閉不行、使天子更命。三日

内有雨、不占。

(二十九ウ) 暈負二氣

開元占曰、青赤而如半暈者、着暈上、為喜。亦、為得地也。

(三十才) 暈珥

宋志曰、暈珥赤、為喜。而為得將也。宋志曰、暈而珥宮中、多忿爭。在

春、則為天子更令。一曰、上、有謀軍在外、外軍有悔。

(三十ウ) 暈白虹

宋志曰、暈而白虹貫日、近臣亂、不則諸侯有叛者。又曰、重暈而白虹貫

日、圍城、則客勝。

(三十一才) 暈四背

宋志曰、四背在暈内、名曰不和。有内亂。又曰、暈而四背如輪者、其國

衆在外、則有反。

(三十一ウ) 暈抱二氣

宋志曰、暈有一抱、抱為順貫暈、在日内西、西軍戰勝。在日東、東軍戰

勝。二方亦如之。

(三十二才) 暈背二氣

宋志曰、暈有二背、有叛者、有克城反。在日東、東軍叛、三方亦如之。又、暈而背、兵起、其分失城。

(三十二才) 白虹貫暈

宋志曰、白虹貫暈者、主有大兵之事。

(三十三才) 暈虹

宋志曰、暈而虹貫日之、至日或不至日、順虹所指、從實所擊之、勝也。

(三十三才) 雲氣如眼

主世有淫邪之事。

(三十四才) 彗星見日下

主有凶災之事。

(三十四才) 日食妖氣

宋志曰、日食有妖氣如虹在日上者、有近臣犯上。

(三十五才) 日食黑氣

宋志曰、凡日食之時、四邊有黑雲者、臣不盡忠。

(三十五才) 日食氣如鳥夾日

宋志曰、日食有氣如鳥夾日、名曰為之。天鷄守日、後宮有謀。

(三十六才) 日食暈珥

宋志曰、日食有暈珥、皆為后妃有謀也。

(三十六才) 日食有白兔

宋志曰、日食有氣如白兔守日、民叛謀、舉兵戎。

(三十七才) 日食有四珥

宋志曰、日食而二珥、或四珥、或白雲中。占、其日甲乙、天下有兵。丙

丁、天下有疫。戊己、有兵喪。庚辛、下近上。壬癸、有土功。

(三十七才) 日食暈兩珥

同前暈珥占之。

日占終

(三十八才) 氣如人隨

宋志曰、月下有氣如人隨、是謂惡成。其分侯王當之。

雲如禽獸

宋志曰、月始出時、有雲似禽獸狀、名曰纂婁。所見之日、德王之方、受其害。甲乙見東方、受其害。餘倣此。

(三十八才) 雲氣如杵

宋志曰、若其旁有白雲大如杵抵月、有戰破軍、抵死將。

月生齒

宋志曰、若生齒、有賊、臣群下相殘。一曰、亡王有備左右。宋志曰、月旁有芒如齒也。

(三十九才) 月垂芒

宋志曰、月垂芒、則國主昏亂。宋志曰、分為二道、僭逆者亡。又曰、毀為四段兩段、將相有謀、三段四段者、天下分亂。

(三十九才) 月自天垂墜

宋志曰、月自天墜入地、大臣亡、憂國。京房曰、月天墜、有道之臣亡。

(四十才) 月暈生珥

宋志曰、暈而珥、從珥擊之利。又曰、期六十日、兵起。又曰、五穀豐登、歲平康。

月暈生虹

宋志曰、月虹生暈直指至月、主破軍、殺將也。白虹貫珥、天下大亂。

(四十才) 月暈四珥

宋志曰、月暈者、臣下專權之象。受冲之國不安。或七日內有風雨、解之。又曰、夜半而珥、邊地大恐。一曰、四珥、女后憂。不則人主立侯王。又曰、國安居喜。三珥或見、國喜將至。

(四十一才) 月暈三珥

三珥或見、國喜將至。

(四十一ウ) 月暈四珥

宋志曰、月暈者、臣下專權之象。受冲之國不安。或七日内有風雨、解之。又曰、夜半而珥、邊地大恐。一曰、四珥、女后憂。不則人主立侯王。又曰、國安居喜。三珥或見、國喜將至。

(四十二才) 月暈三珥

三珥或見、國喜將至。

(四十二ウ) 重暈背珥

宋志曰、暈有輩氣、所臨者、敗、重有背叛從中起。

(四十三才) 月暈三重

宋志曰、暈三重、天下受兵。若有赤雲貫之、其下亡地。暈九重、兵起、流血、亡地。暈四重八重、有亡國死亡。五重、女后憂。七、則其下主凶。一曰、易主。六重、其分失政。十重、有大變。一云、天下更主。

(四十三ウ) 暈虹霓

宋志曰、月暈而虹霓直指至月、主破軍、殺將也。

(四十四才) 暈白氣

宋志曰、白氣從中出者、主人勝。暈而白氣從外、外人板入板、城得將。雲來貫暈、左右吏死。橫貫之、兵起者勝。

(四十四ウ) 交暈

月暈相連如環、為兩軍兵起、君爭地。交暈赤色有光、其下不出二年、兵起。

(四十五才) 月暈兩珥

宋志曰、月暈兩珥、為風雨。月暈再重、主大風。宋志曰、月無暈而有珥、主有喜。兵在外、亦喜。又曰、月珥占其色。

(四十五ウ) 白暈貫月

宋志曰、白暈貫之、其下有亂者。晉志曰、白虹貫月、其下廢主、王者惡之。

(四十六才) 重暈珥

宋志曰、重暈而珥、主有大風雨七日。無則大戰軍勝。

(四十六ウ) 十字度暈

宋志曰、十字度于暈中、兵喪並起。

(四十七才) 月暈背珥

宋志曰、月暈背珥者、主有反臣。

(四十七ウ) 重半暈珥

宋志曰、重半暈珥、主天下有大風雨三日。無則海中兵起。

(四十八才) 月暈玦珥

宋志曰、暈玦者、主有兵興。

(四十八ウ) 月暈珥抱

宋志曰、月暈珥抱、主有喜慶。

(四十九才) 暈抱二氣

宋志曰、月生暈抱二氣、主人君有喜。

(四十九ウ) 月暈戴珥

荆州占曰、月暈戴珥、主宮中有喜。

(五十才) 白虹貫暈月

宋志曰、暈如連環有白虹貫于暈、不及一月、貴人有陰謀。白虹貫月、大兵將起、軍戰有功于野。

(五十ウ) 月生背暈

宋志曰、月暈背氣者、主有反臣。

(五十一才) 連環及斗

宋志曰、開元占曰、月暈連環及北斗、天下大亂、國喪、民流千里、不則有拔城反地。一曰、天下兵火大起。

(五十一ウ) 重暈于魁

開元占曰、重暈于魁、亦、是北斗前第一第二星、大臣下獄、流移千里。

(五十二才) 雜氣全見

宋志曰、雜氣俱見、主宮中及大臣。有德者受慶、無德者受殃。

(五十二ウ) 暈日月

開元占曰、日月皆暈、戰兵不合。謂晝有日暈、夜有月暈也。

(五十三才) 抱背二氣

開元占曰、月旁氣、且抱且背、為不和。有欲為逆、有欲為忠者。

(五十三才) 戴珥

宋志曰、珥且戴、不出百日、主有喜慶。

(五十四才) 月生背珥

宋志曰、無暈而有背珥、臣下弛縱、將欲自相殘備左右、吉。房京曰、月背珥、其國有叛臣。

(五十四才) 四珥

宋志曰、月有四珥、臣下有謀、謀則不成。

(五十五才) 月生背珥

宋志曰、無暈而有背珥、臣下弛縱、將欲自相殘備左右、吉。

四提

京房曰、宋志云、月有四提、天子無后、其下憂。

(五十五才) 重半暈珥

京房曰、重半暈珥者、邊城有急兵來。又曰、主有大風雨七日內、則解急兵之事。

(五十六才) 天文圖象玩占後序

夫天象者氣也。乃陰陽五形之精、生於太陽之旁。祥變無窮占書雜淫。然載其名而未載其形。雖占、無拠以是為非。因此、今將觀象玩占詳異賦等十餘家書、都類集在一處、起自日瑞應之占、析成二百四占、依經考究探為慶雲瑞氣之圖。謹按諸書、註其祥異休咎之占。名曰圖象玩占。俾觀者一覽于斯常變之道、瞭然在目、則崇天之術、不亦神乎。謹識於後。

日陽人君之象也。月陰后妃之象也。君后動輿天合。故事機將發於下、則

天象、光見於上、吉也凶也。告報無忒

(五十六才)

欲君后脩省彌之。此天心仁愛之深意也。故圖日月變異之形狀、旁考諸家經驗之占、極其精密伎。後世君得之、以為脩德之戒。臣得之、以為調變

之助。夫豈小補哉呼。天人感應之際、淵乎微矣。

要旨

本稿で対象とするのは、名古屋蓬左文庫が所蔵する『天文図象玩占』（請求番号一〇一〇二）という名の漢籍である。本書は、全四冊（不分巻）で構成されている天文関係の占書であり、文庫では「子部・術書類」に分類されている。本書の最大の特徴は、蓬左文庫本と同名の書名を持つ本が管見の所未発見であるという点にある。

本書についての専論は皆無であるため、本稿では、まずは本書の基礎情報を提供した。全体の構成を掲げ、本書が彩色を持つ上図下文形式を採っていること、本書には「御製序」「天文図象玩占」（序文）「天文図象玩占後序」の三種の序文が付されていることや引用書目の特徴について触れた。

続いて、本書同様に上図下文形式を持つ明代の類似の書物『天元玉曆祥異賦』と宋代の『宝元天人祥異書』について触れた。その上で、本書と両書との比較検討をしてみると、本書第二冊と第三冊は図案・内容・項目ともに『天元玉曆祥異賦』とほぼ同じであることが判明した。しかしながら、残る第一冊と第四冊は両書とも合致せず、また両冊のみ目録が付されていること、両冊に収載されている項目が日月の雲氣占のみであるのだが、これが序文・後序の内容と合致すること、さらには、後序に触れる占文の数が両冊を合わせた数に近いことから、両冊のみが元来の『天文図象玩占』であり、第二冊・第三冊はそれ以後から付されたものであるということが判明した。

最後に、本書の日本伝来時の状況を蓬左文庫に残された蔵書目録などから推察したところ、本書は中国で作成され日本に輸入された明本であり、初代藩主徳川義直・もしくは二代光友の時代に尾張徳川家に持ち込まれ、しばらくは藩主の元に置かれ、その時は「雲氣書」と称されて

いた。しかし、書庫に移された享保六年から天明二年の間に改装され、外題に「天文図象玩占」と表記が付け加えられたものであることが考えられるとした。

【キーワード】 天文図象玩占、蓬左文庫、天元玉曆祥異賦、宝元天人祥異書、蔵書目録

(藤女子大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇一四年七月二八日受付、二〇一四年九月二九日審査終了)

図 1 『天文図象玩占』第一冊

図 2 『天文図象玩占』第一冊

圖 3 『天文図象玩占』第二冊